

坂東観音霊場 風に吹かれて

第2巡 巡拝記



(沙門亮盛輯「坂東霊場記」扉挿絵より引用)

本稿は、坂東観音霊場三十三札所を2回目に巡拝した折のメモである。
5年程前に第1回目の巡拝をした時には巡拝の作法と修行・菩提に気を取られていたので、暢んびりと巡るという心の余裕が無かった。

今回の2回目巡拝はそのような発心や修行の真似事はさらりと忘れて、
風に吹かれて気の向くままに札所を物見遊山して来た簡単なメモである。
御同輩がぶらりと散歩・逍遙に出られる折のご参考になれば幸甚である。

巡拝期間：令和4年12月～令和5年7月

令和5年7月

寓多羅亭 鈍助 述之

はじめに

坂東観音霊場33札所は、西は神奈川県小田原市から東は千葉県銚子市まで、南は千葉県館山市から北は茨城県大子町までの札所間総延長距離1,300kmに及ぶ。坂東以外の日本百観音霊場札所巡礼路（西国、秩父）は巡礼古道が復元されているので巡礼道を全て徒歩で辿ってもそれなりに趣があるが、坂東は札所間の巡礼路はその殆どが国道などの幹線道路に変化しているので、徒歩で巡礼しても車の排気ガスと騒音を浴びるだけだから、最寄りの駅までは電車で行き、最寄駅から里山や地道を歩いて参詣出来る時には徒歩で、それ以遠の場合には路線バスかタクシーを使う方が賢明である。

ただ、札所によっては、山中の奥深い場所にあるお寺は路線バスもタクシーも無いという札所も多いので、時間は捨てるほどあるという方は一日掛りでノンビリと里山の風物や、庚申塔、道祖神、馬頭観音碑、里程標石などの路傍の石碑などを見ながら歩かれるのも一興であろう。路傍の畑で畑仕事をされている農家のオジサンに道を聞きがてら世間話をするのも悪くないし、運が良ければ果樹園の新鮮な果物をお接待で頂ける仏縁もあろう。要はご朱印スタンプラリーだけで札所だけを章駄天の如く走り過ぎるのではなく、万物有情、生死即涅槃の心で歩けば、功德も多いのではあるまいか。

そのようなことから、この駄文は札所や札所巡拝の詳細は割愛し札所の見どころのみを簡単に記した単なるメモである。札所への行き方は、最寄駅からのルートで記した。

尚、併載したご朱印は重ね印である。参拝日は第1巡目と第2巡目の両方が記入されている。また、併載した写真は一回目巡礼の際に撮影した写真も併用した。撮影禁止の仏像写真などは寺院のHPなどから引用させて頂いた。



も く じ

札所番号	観音霊場名	山号、寺号	宗派	所在地	頁
第 一 番	杉本観音	大蔵山 杉本寺	天台宗	神奈川県鎌倉市	4
第 二 番	岩殿観音	海雲山 岩殿寺	曹洞宗	神奈川県逗子市	5
第 三 番	田代観音	祇園山 安養院	浄土宗	神奈川県鎌倉市	7
第 四 番	長谷観音	海光山 長谷寺	浄土宗	神奈川県鎌倉市	8
第 五 番	飯泉観音	飯泉山 勝福寺	真言宗	神奈川県小田原市	10
第 六 番	飯山観音	飯上山 長谷寺	真言宗	神奈川県厚木市	12
第 七 番	金目観音	金目山 光明寺	天台宗	神奈川県平塚市	14
第 八 番	星の谷観音	妙法山 星谷寺	真言宗	神奈川県座間市	16
第 九 番	慈光寺	都幾山 慈光寺	天台宗	埼玉県ときがわ町	17
第 十 番	岩殿観音	巖殿山 正法寺	真言宗	埼玉県東松山市	21
第 十一 番	吉見観音	岩殿山 安楽寺	真言宗	埼玉県吉見町	23
第 十二 番	慈恩寺観音	華林山 慈恩寺	天台宗	埼玉県さいたま市	25
第 十三 番	浅草観音	金龍山 浅草寺	聖観音宗	東京都台東区浅草	26
第 十四 番	弘明寺観音	瑞応山 弘明寺	真言宗	横浜市南区弘明寺町	27
第 十五 番	白岩観音	白岩山 長谷寺	修験本宗	群馬県高崎市	29
第 十六 番	水澤観音	五徳山 水澤寺	天台宗	群馬県渋川市	31
第 十七 番	出流観音	出流山 満願寺	真言宗	栃木市出流町	34
第 十八 番	立木観音	日光山 中禅寺	天台宗	栃木県日光市中禅寺	37
第 十九 番	大谷観音	天開山 大谷寺	天台宗	宇都宮市大谷町	39
第 二十 番	益子観音	独鈷山 西明寺	行基菩薩	栃木県益子町	42
第二十一番	八溝山	八溝山 日輪寺	天台宗	茨城県大子町	44
第二十二番	北向観音	妙福山 佐竹寺	真言宗	茨城県常陸太田市	47
第二十三番	佐白観音	佐白山 正福寺	真言宗	茨城県笠間市	48
第二十四番	雨引観音	雨引山 楽法寺	真言宗	茨城県桜川市	50
第二十五番	大御堂観音	筑波山 大御堂	真言宗	茨城県つくば市	56
第二十六番	清瀧観音	南明山 清瀧寺	真言宗	茨城県土浦市	59
第二十七番	飯沼観音	飯沼山 円福寺	真言宗	千葉県銚子市	61
第二十八番	滑河観音	滑河山 龍正院	天台宗	千葉県成田市	62
第二十九番	千葉寺	海上山 千葉寺	真言宗	千葉市中央区	63
第 三十 番	高倉観音	平野山 高蔵寺	真言宗	千葉県木更津市	64
第三十一番	笠森観音	大悲山 笠森寺	天台宗	千葉県長南町	65
第三十二番	清水観音	音羽山 清水寺	天台宗	千葉県いすみ市	68
第三十三番	那古観音	補陀洛山那古寺	真言宗	千葉県館山市	71

(註) 各札所の冒頭項目に記した本尊は、その寺院の本来の本尊が観音菩薩以外の本尊である場合にも、観音霊場としての本尊を記した。例えば、本来の本尊は薬師如来、観音霊場の本尊は聖観音菩薩など。

なお、各札所の詳細は下記第1回巡拝記をご参照頂ければ幸甚である。

<http://yamanami-harukani.world.coocan.jp/bandou33kannon/bandou33kannon-junnreiki.pdf>



見どころ

鎌倉最古の仏地と称される杉本寺（杉本観音）の参道石段は、奈良時代の昔から参詣者に踏まれて見事に摩耗し苔が生えている。そのため現在は閉鎖されていて通れないが、苔が芽吹く頃には見事な苔の庭となる。

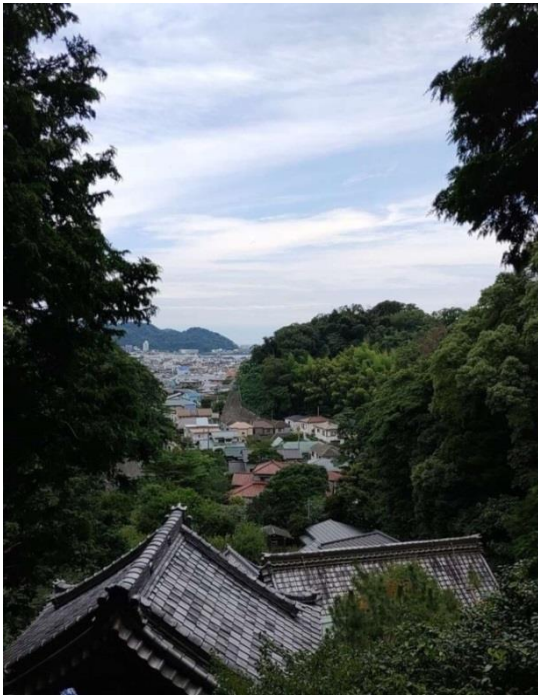
また、本堂は堂宇は小さいながら最近では珍しい茅葺である。本堂の厨子には三体の秘仏本尊（十一面観世音菩薩）立像が納められている。外陣と内陣の区別も無い様な狭い内陣には入山料三百円也で誰でも入ることができて、目の前で秘仏本尊三体を拝顔することができる。開山・行基菩薩自ら刻んだ観音菩薩像、その後追記された慈覚大師作および花山法皇の命により恵心僧都が刻んだ観音菩薩三像が三尊同殿で祀られている。

普通の札所であれば、本尊は秘仏と称して滅多に拝ませて頂けないが、この杉本観音では内陣に進んで眼前で三尊のお顔に接することができる。

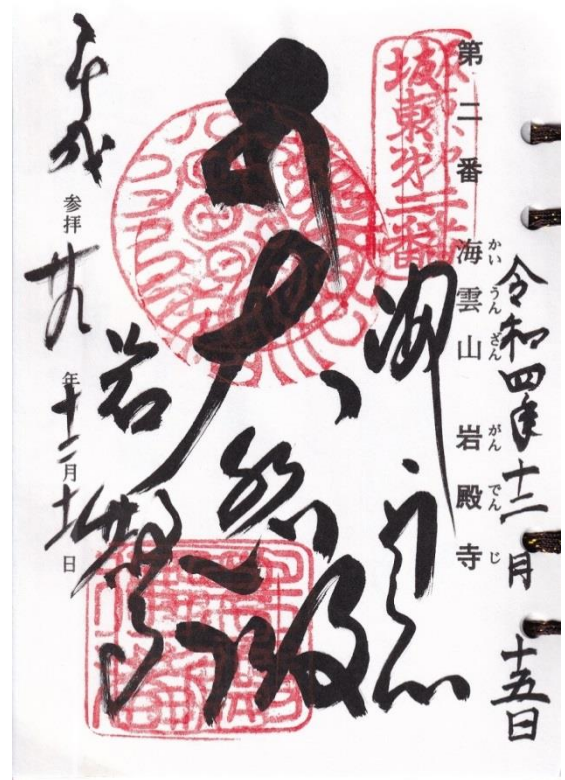
また、内陣には秘仏三尊の他にも、運慶作御前立十一面観音像、同じく運慶作の地藏菩薩、観音三十三身、快慶作の地藏菩薩、作者不詳の不動明王、おびんづる様、毘沙門天なども祀られていて仏の顔を拝観するに飽きない。

交通 JR 鎌倉駅から京浜急行バス「金沢八景行」他、
「杉本寺前」停留所下車すぐ。





（観音堂前の大樹の樹叢から逗子海岸が霞んで見える）



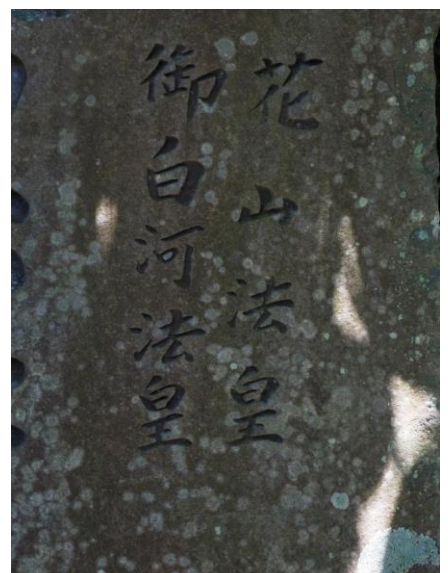
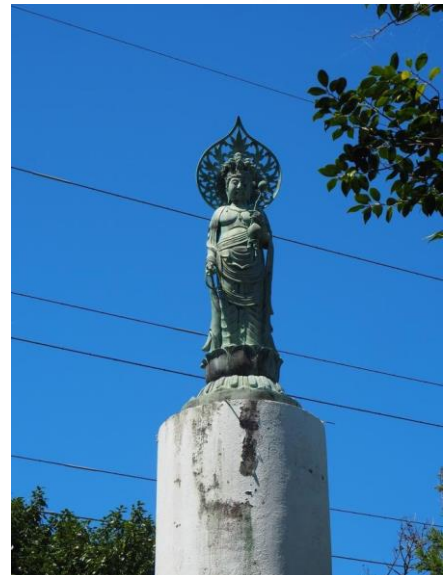
見どころ

岩殿観音の所在地は鎌倉市ではなく逗子市であるが、創建の頃は実質的には鎌倉の領域であった。今は鎌倉から途中の台地に鎌倉・逗子ハイランドという大住宅団地が出来ているが、往時は第一番の杉本観音がある鎌倉市二階堂から衣張山を越えて逗子市久木の岩殿観音まで巡礼古道を辿ったのであろうが、現在のように住宅団地を迂回して大廻りをしなくても行けたであろうから行者の足では1時間程も歩けば十分に到達できたであろう。

この岩殿観音の裏山には往時の巡礼古道の地道、古道を示す道標石や聖教観音吉祥塔（長寿観音、右上写真）が建っていて、ここを歩いて見るのも一興であるが、残念ながら現在は「危険につき立ち入り禁止」となっている。

この寺の境内には特に拝観すべき伽藍も無いが、上に掲げた写真のように長い石段を登った所に建っている観音堂の前の大樹の樹叢の隙間からは逗子湾が眺められてなかなかの景色であった。山号「海雲山」の由来となっただけのことはある。

また、寺伝によればこの寺は西国観音霊場巡礼の創始者徳道上人の開山、その後西国観音巡礼中興の祖と言われる花山法皇がこの地を訪れて法要を営み、更には熊野詣を33回も行った後白河法皇が参詣して坂東三十三箇所霊場の第二番に定めたという縁起がある。



いずれも後世の作り話であろうが、この石碑の前に座って頭上を流れる松籟の音でも聴きながら花山法皇や後白河法皇の昔を偲んでみるのも悪くなかろう。



(岩殿寺縁起碑 花山法皇、御（後）白河法皇行幸の刻あり)

また、第一番札所・杉本観音からの往時の巡礼古道を見当を付けて同定しながら歩いて見るのも悪くなかろう。但し、途中で藪漕ぎや急崖斜面を攀じ登らねばならないこともあるので、それなりの体力と脚拵えが必要である。

この岩殿観音は、鎌倉の寺の中では勿論の事、逗子の寺の中でも極く地味な山中の寺院であるから古都名刹案内などというパンフレットに載ることもないお寺であるが、それだけに観光客も居らずひっそりと静かなひと時を過ごせるというものではなかろうか。



(山門)



(山門から3百段の石段を登った観音堂)

交通 JR 逗子駅から線路沿いに鎌倉名越方面に徒歩 30 分

第2回目巡拝日：令和4年12月15日



見どころ

第三番田代観音（安養院）は、北条政子の墓所（宝篋印塔）として知られているが、その他にも鎌倉で一番古い大きな宝篋印塔（国重要文化財）や、鎌倉市天然記念物の槇の巨木（樹齢7百年）もある。

しかし、この寺の売りは何と言っても境内一面に咲き誇るオオムラサキ躑躅であろう。5月の満開のシーズンにはこの安養院の参道や境内は言うに及ばず、山門前の道路も躑躅を観る観光客で大行列となり、門前を通る車の列も大渋滞を起こす塩梅となる。

マ、花も仏の台であるから、これはこれとして、今回は本堂の裏にひっそりと祀られている身代わり地蔵をお薦めしたい。身代わり地蔵というのは衆生の危難や苦しみを代ってお引き受け下さる有り難いお地蔵様のことである。

ここの身代わり地蔵様は、本堂裏では北条政子の宝篋印塔墓や重文の宝篋印塔が目立つので見落としやすいが樹木の枝の下で布団を被ってひっそりと寝ておられる。その温顔なお顔を拝んでいると、何となく心の安らぎを覚えるのである。



（身代わり地蔵尊）

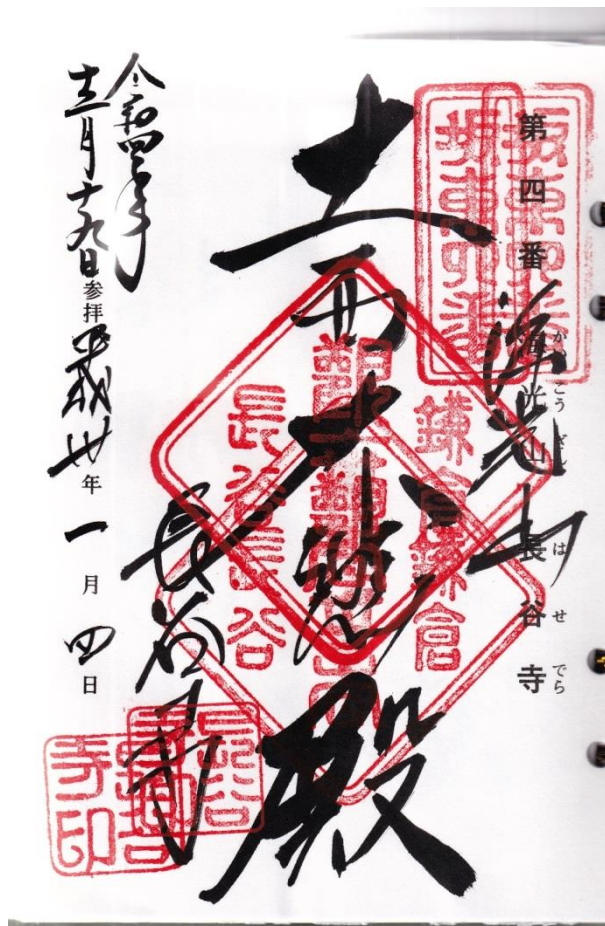


（躑躅満開の頃の山門）

交通 JR 鎌倉駅から京浜急行バス「緑ヶ丘入口行」他、「名越」停留所下車すぐ
第2回目巡拝日：令和4年12月15日



（本尊 十一面観世音菩薩立像）



見どころ

“長谷寺”（「はせでら」、又は「ちょうこくじ」）を名乗る寺院は、坂東観音霊場三十三札所には3ヶ寺あり、全国では240寺を数えるそうだ。本邦全体の総本山は奈良の長谷寺であるが、東日本にある“長谷寺”を統括する本山はここ鎌倉の長谷寺であろう。

建長寺や円覚寺などの鎌倉五山が鎌倉の由緒ある古刹であるのに比べると、同じ鎌倉の古刹でも長谷寺は少々変わっていて、マ、仏式遊園地の感がある。それぞれの堂伽藍に祀られている諸仏像は、高さ三丈（9m）に及ぶ本尊・十一面観世音菩薩立像はじめ、厄除阿弥陀像、多数の地蔵尊像、大黒天など夫々は大了た仏像であろうが、何となく夜店の見世物であるようにも思える。また、最近のデジタル技術で仏の隅々まで見せる観音ミュージアムも大凡参拝というよりも博物館の企画展示という趣である。

特に本尊の前は押すな押すなの行列になっているので、オチオチ拝観できない。そういう訳で、同じ境内でも少し“僻地”にある弁天堂に腰を屈めて入って、壁面に彫られた弁財天とその眷属である十六童子を拝観することをお勧めしたい。但し、常に腰を曲げていないと天井で頭を打つこと、暗い洞窟の中であるので尊像が暗くてよく見えない為に背骨と目ン玉が頑丈な人以外にはお勧めできないが・・・。

琵琶を抱えた弁財天様の豊かな顔を拝顔していると、何となく心が和らいでくる。私は生来前世の悪因に祟られ、今生でも悪事の限りを尽くしてきたので、怖い顔をしている閻魔大王や不動明王などの前に出ると恐ろしくて御叱呼をチビるのであるが、弁天様の前なら安心して寛いで居られるのである。



(↑ 弁天窟の壁面に彫られた諸像) (琵琶を抱いた弁財天⇒)



仏像の展示ではないが、経蔵（転輪蔵）では回転式の経架を一回転廻すことによって、経架に納められた一切経を全て読誦した功德が得られ、また般若心経の真言を刻んだマニ車 18 基も設置されているので、これらを廻して功德を得た心持ちになるのも悪くはないが、この経蔵は観音縁日（毎月 18 日）にしか経蔵が開かれていないので参詣日の日付に要注意である。

また、冒頭に出したポスターの「御足参り」は、本尊・十一面観世音菩薩の御足に直接触れてお願いごとが出来る貴重なご縁であるが、通常は年間 1 日だけ、12 月 18 日の観音縁日にしか開帳されないので、参詣日に注意を要する。私は、まだポスターの開創 1300 年記念の特別拝観「御足参り」の期間中であると期待して 2022 年 12 月 19 日に参ったのであるが、誠に残念ながら前日の 12 月 18 日でこの行事は終わっていた。

しかしながら有り難いことに、昨日までの「御足参り」参詣の跡を整頓するために御坊様が内陣に入られて清掃されていたために、普段は拝観できないご本尊観音様の御足のご様子も拝見できて有り難かった。これも何かの仏縁であろう。

序のことながら、境内の裏山には眺望の散策路が作られていて、この小径からは鎌倉の街と相模湾が一望できる。小径の周りには紫陽花が植え込んであるので、紫陽花の頃が最適なのではあるまいか。この散策路への入り口が分りにくいので人混みになっていないのも結構である。境内の花は年中いろいろな花が咲いており、また紅葉・黄葉も素晴らしいので、その方面に興味がある方は寺のHPに載っている花暦で開花状況を確認して行けばよろしからう。

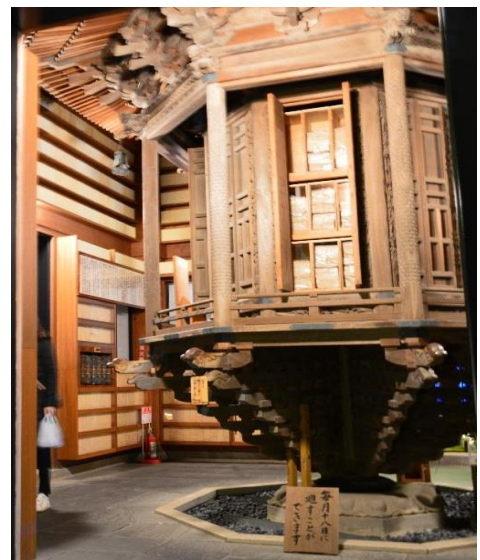
交通

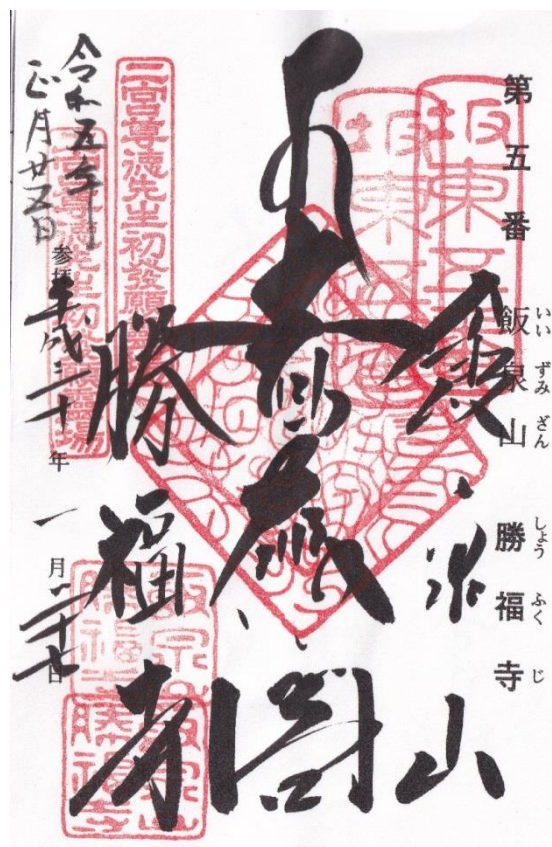
江ノ電「長谷寺」駅
下車、徒歩 10 分

(右写真)

左：散策路からの
相模湾と三浦半
島の山並み。

右：転輪蔵





見どころ

小田原市の北郊、酒匂川左岸の住宅街の街中にあるので、小田原駅からバス 15 分の近距離にあるが、その割には参詣者は誰も居ず燭台や香炉も空であった。

開祖が、奈良時代の孝謙女帝を色仕掛けで蕩かして“すわ！天皇”の座に座れるかというところまで階段を登り詰めた悪僧の弓削道鏡であることが影響しているのかも知れない（寺伝によれば、この寺は道鏡が孝謙女帝の没後失脚し、下野國に左遷（流罪）される途中の小田原で創建した寺という）。

堂宇も大日如来堂、馬頭観音堂、納経堂など二三あるが、いずれも閉堂されていて拝むことができない。本尊の十一面観世音菩薩も拝殿の戸と金網が邪魔してよく拝めなかった。

しかしながら、境内に祀られている四国遍路八十八札所の勧請仏は石仏が本地仏なりに刻まれていて一番札所の霊山寺・釈迦如来から八十八番結願寺の大窪寺・薬師如来まで見て歩いていると、かつて四国遍路を歩いて 2 回廻った時のことが彷彿としてきた。

興味のある方は、江戸時代の大坂の僧・宥弁眞念が著した『四國徧禮道指南』（「しこくへんろみちしるべ」）に挿入されているそれぞれの札所の本尊の挿絵と見比べつつご覧になると尚一層の興味が湧くのではなかろうか。（この本は講談社学術文庫として出版されているので容易に入手できる。往時の遍路ガイドブックであるから各札所の縁起や伝承、御利益、境内や付近の土地の様子、札所への行き方なども記載されている。稲田道彦訳注、講談社 2015 年刊）。

また、この寺の手水鉢はちょっと凝った造作で、青銅製の舟形水鉢の舳に竜頭が据えられ艫には小さな観音様が祀られている。水鉢はたまたま巡ってきた 10 年に 1 回という極寒で凍っていた（次ページ上の写真）。

マ、その他には特段の見るべき物も無かったが、八脚仁王門の蛙股などに彫り込まれた彫刻は何やら由緒ありそうな鑿に見えた。写真が暗くて見にくい、前ページ冒頭の仁王門の天井をご欄頂きたい。

また、本堂（観音堂）の内陣は戸や蔀や金網に遮られて暗くてよく見えなかったが鴨居に掛けられていた扁額の天女（迦陵頻伽）図はやや現代風ではあったが、マ、拝んでいると何やら“御利益“がありそうな御顔立ちであったので、拝んでおいても損は無からう（下写真）。何やら少々銀座の中級クラブのママ風ではあるが・・・。

（手水鉢、手前が舐の竜頭、奥が鱸の観音像⇒）

（↓本堂天女の扁額、上側から左、中、右の順）



交通

小田原駅から大井松田行バスで15分、
「飯泉観音前」下車、すぐ。

第2回目巡拝日：令和5年1月25日



見どころ

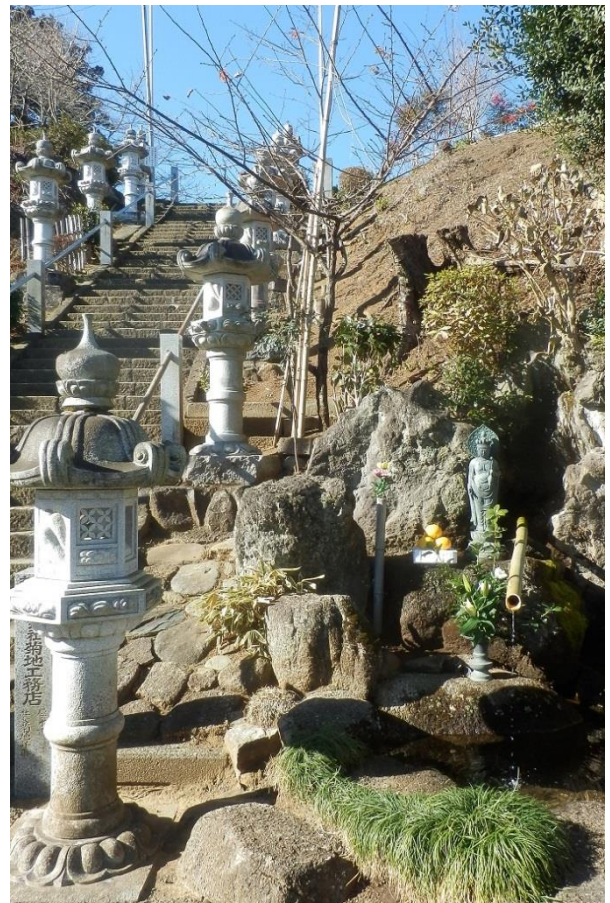
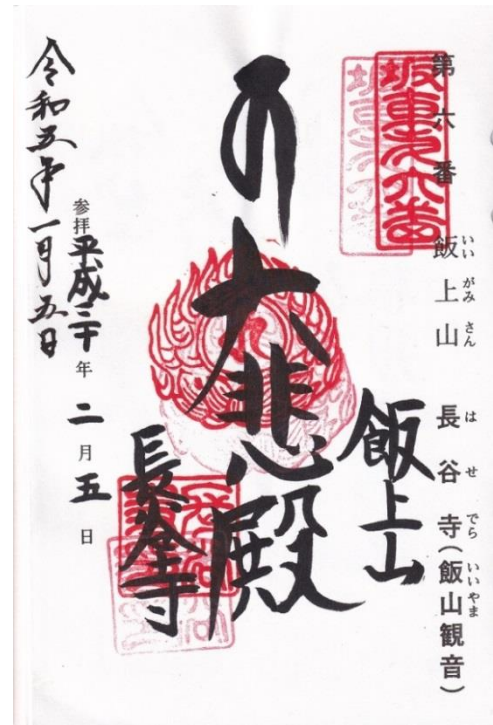
この寺は厚木市街地からバスで半時間ほど宮ヶ瀬方面に入った白山丘陵の麓にある静かな佇まいの山寺である。奈良時代、行基上人の創建と伝えられる古刹であるが、以来、近郷の人々によって守られてきた庶民の寺だそうだ。

同じ庶民の寺と言っても、例えば同じ神奈川県にある第14番「弘明寺観音」（横浜市）が下駄履きのご近所衆が三々五々集まって来て憩い合う庶民の場になっているのとは境内の様子が些か異なり、麓にある山門から長い石段を上った丘陵の中腹にある本堂（観音堂）までの境内は綺麗に清掃が行き届いていて、また、参道の途中に祀られている仏像や泉水にもその全てに新しい花や蜜柑が供えられていて仏法に満ちた静謐な佇まいのお寺であった。

比較の例に出した弘明寺観音は老若男女が始終出入りする街中の庶民寺であるから賑やかな境内であったが、この飯山観音はどことなく世俗を超越した趣が感じられた。私が参詣している間は、家族連れ2組と老母の手を引いた息子の1組が参詣されているだけだったが、何れもご近所の方が普段着でちょっとお線香を上げに立ち寄ったという塩梅には見えず、どこか遠くに移住した檀家の縁者が服装を整えて菩提寺に年に一回正月の参詣に訪れたというように見えた。

遠方に転居した人でも故郷の菩提寺との仏縁を大事に守っておられるということは、このお寺にそれだけの功德があるということではなかろうか。

（参道や境内は綺麗に掃き清められ、境内の仏像、池泉にも常に新しい花と蜜柑が祀られていた）



宝形（方形）造屋根の反りが見事な静かな観音堂で十一面観音の真言「おん まか きやろにきゃ そわか」を唱えていると深山幽谷の気に満ちた松籟が吹いて来て、前世の悪因と今生の悪行の為に地獄に落されるべき輩の私メでも何か心が救われたような気分になったのであった。

扨て。

この飯山観音「長谷寺」（ちょうこくじ）は、かつては伽藍が多数並んでいた名刹であったのであろうが、今は本堂（観音堂）と鐘楼が残っているだけのこじんまりとした境内であるから特に見るべき寺宝なども無いと思われるが、長い石段参詣道の途中にある仁王門の天井にちょっと目をやって頂くとちょっと功德を頂いたような気分になる彫り物があった。

麓の山門からの長くて急な石段を登って来た者には息が切れて仁王門の天井を仰ぐ余裕は無いのであるが、少し息を整えて見上げて頂きたい。

天井に彫られているのは「捨身飼虎」の彫刻で、薩捶往時（前世のお釈迦様）が飢えた虎の親子に我が身を投げ与えて喰わせ、親子の虎を救ったという故事による。

上段左側の彫刻は衣服を脱ぎ崖の上に立つところ、同右側は崖から身を投じるところ、下段は虎にその身を与えるところを表わしている。

更に奥に眼をやると、陽光が射し込んでいる天窓の奥の蛙股に仏足跡が彫り込んであるのも心憎い。その更に奥の蛙股に彫り込まれている輪形が見えるが、これは仏具の一種であろう。この仁王門は令和に入ってから大規模改修されたそうで、新しい木の材が未だ匂っているような塩梅なのがこれまたよろしい。

話しは飛ぶが、観音堂の裏山は白山丘陵に繋がっていて、かつて相州で行われていた八菅修験の修験道が通っている。この八菅修験は現在の愛川町にある八菅神社に根源の地を持つ修験道で相州大山近辺で盛んに行われた山伏修験であった。現在の相州大山や丹沢の登山道はすべてこの八菅修験と、もう一つの日向地区を根源地とする日向修験の両修験の修験道であった。飯山観音から裏山の白山（標高 284m、白山神社がある）迄は 30 分ほどの緑のトンネルのハイキングコースで、白山頂上の展望台からは遠く東京のスカイツリーや横浜のランドマークタワー、更に房総半島も見渡せる。白山山頂から物見峠、順礼峠を経由して広沢寺や七沢温泉方面にも下れるので、このハイキングもオススメである。

交通 小田急小田原線「本厚木駅」から宮ヶ瀬方面行バス 30 分、「飯山観音前」下車 10 分。



第七番 金目観音（金目山光明寺） 天台宗 聖観音 神奈川県平塚市

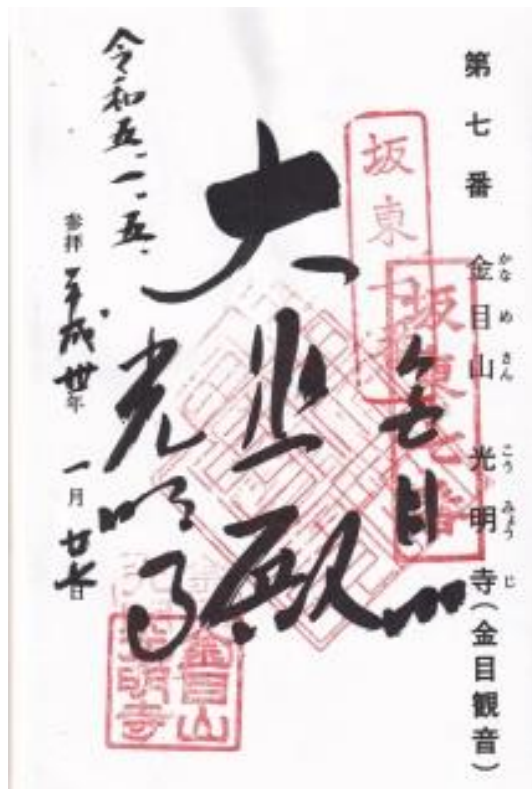


見どころ

この寺は奈良時代よりも古い飛鳥時代（大宝2年、702年）の創建で、伽藍には本堂（観音堂）、文殊普賢菩薩堂、歓喜堂（聖天尊）、阿弥陀堂、仁王門、鐘楼などが並んでいる古刹であるが、今は在の信者に祀られている庶民の寺である。因みに、本堂は平塚市内では最古の本堂だそう。観音堂に祀ってある本尊の聖観世音菩薩立像は、60年に1回しか開帳しない秘仏だそうで、本尊が安置されている国指定重要文化財の内陣厨子は扉が固く閉じられたままである。また、その他の御堂も閉じられていて内陣の様子も暗くて見られないので、特段の見どころというのも見つからなかった。

平塚市発行の郷土案内書によれば、寺の前を流れる金目川の土手の桜並木と遥か西の御殿場に浮かんでいる富士山が平塚八景となっているそうだ。マ、桜見物や富士山は別として、この観音寺院の見どころは敢えて挙げれば仁王門の金剛力士像と観音堂に掲げられた天女の像であろうか。

この金剛力士像は南北朝時代の作であって、関東地方有数の中世金剛力士像の傑作だそう。力士の肩から頭部に掛けての彫の力強い鑿にはなるほどと思わせられた。



（金剛力士の阿吽像
引用出典：平塚市 HP）

天女の像（下の写真）も艶めかしくて誠に結構であった。聖観世音菩薩が垂迹されたお姿であるとする、その筋の好事家にとってはこれまた結構な仏縁でもあろう。



境内に設えられていた水琴窟の音も深い味わいのある水音であった。
境内はひっそりとしていて誰にも遇わなかった。



交通 JR 東海道線「平塚駅」から秦野駅行バス 30 分、「金目駅」バス停下車すぐ
または小田急小田原線「秦野駅」から平塚駅行バス 25 分、「金目駅」バス停下車すぐ

第 2 回目巡拝日：令和 5 年 1 月 5 日

しょうこく

第八番 星の谷観音（妙法山星谷寺） 真言宗 聖観音 神奈川県座間市



星谷寺には七不思議と伝えられているものがあるそう。

- ①普通は二箇所ある撞座が一箇所しかない梵鐘
（日本三奇鐘と言われている）
- ②咲き分け散り椿（一本の椿から5種類の花が咲き、花卉が一枚ずつ分かれて散る）
- ③観音草という薬草（野草）
- ④幹が乳房のようになっているもみじの老木
（撫でると母親の乳の出がよくなるという。現在は枯死）
- ⑤不断桜（年中どこかの枝に花を咲かしている桜の木）
- ⑥手で持って振ると水の音がするという楠の化石
- ⑦昼でも星が映っている星の井戸

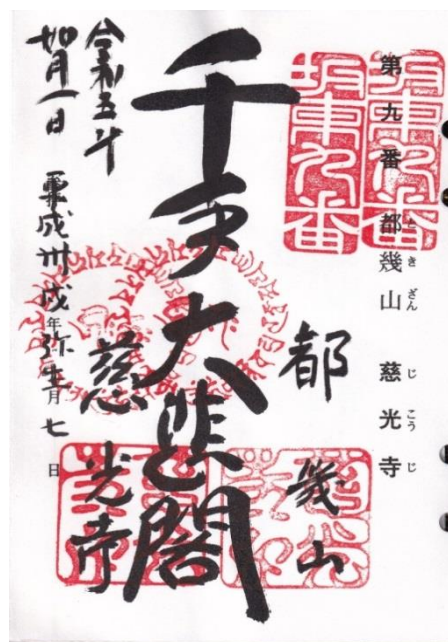
何れも後世に作られた作り話のようで胡散臭い感じがするが、「信ずるものは救われる」の口であろうから、これはこれで良しとしよう。

市街地のど真ん中にある寺なので、風情などという趣は無いが、観音堂の欄間に掛けていた天女の像は一つ前の札所の金目観音の天女像よりも更に艶めかしいので、これを拝むと仏縁も更に多く頂けるのではあるまいか。



交通 小田急小田原線「座間駅」から歩10分

第2回目巡拝日：令和5年1月5日



見どころ

坂東観音霊場 33 札所は大抵が市街か近郊にあるが、その中でも辺鄙な山中にある札所が二つある。一つは茨城県・栃木県・福島県境の深い山中にある八溝山観音、もう一つがこの慈光寺観音である。前者は周囲 4 里の中には集落も民家も全く無いという八溝山地の天辺の八溝山(1022m)近くにあるので、これは西国観音霊場、秩父観音霊場も合わせた日本百観音霊場でも四国遍路八十八札所でも別格の辺鄙度であるが、後者のこの寺は麓の集落から徒歩でも 1 時間ばかりで辿り着けるし車なら 10 分程度であるから、辺鄙度はそれほどでもないが深山幽谷の気が漂う山紫水明の霊場には違いない。ナルホド、境内の高みからはすぐ西側に奥武蔵の山々、北側には秩父の山並みが重なっていた。

寺の案内パンフレットには「関東最古の山岳寺院」と紹介されていた。寺伝によれば、飛鳥時代に唐僧鑑真和尚の高弟により開かれ、鎌倉時代には源頼朝から田畑 1,200 町歩の寄進を受けて鎌倉幕府祈願寺として繁盛し、一山 75 坊を擁する大伽藍であったそう。

この寺は、寺がある埼玉県西部の比企の郡（こおり）や都幾川流域の政治・経済・文化の中心となっていた大寺で、現在でも有名な都幾川の建具、小川町の和紙、狭山茶などの名産品はこの寺が発祥の地であるそう。現在では、急傾斜の広い境内には観音堂や般若心経堂、阿弥陀堂、開山塔などの僅かな堂宇が残っているだけだが、境内に設けられた多くの巡拝路の跡が往時の繁栄を偲ばせていた。

因みに、比企の郡と言え、平安時代末期から源頼朝を支えた武蔵武士比企一族の出身地である。比企一族は頼朝没後に北条氏によって滅ぼされるが、鎌倉幕府では強い権力を持っていた一族であった。そのようなことから、この地は鎌倉と深い因縁があり、この寺がこの地方の政治経済を握っていたことは、この寺の寺宝に後鳥羽天皇書写の経典(国宝)や国重文、県文化財などが沢山納められていることから、ナルホドと頷ける。

さて、前置きが過ぎた。

前回は朱印を頂く為に本堂に上がり込んだ際に暇を持て余していた老住職の餌食になって 1 時間ばかり本寺の観音堂本尊である千手千眼十一面観世音菩薩の功德についての蘊蓄を

聞かされた挙句、麓の停留所から最寄駅へのコミュニティバス最終便に乗り遅れて予定外のタクシー代ウン千円を払う羽目になった。しかしながら、この住職講話はなかなか要点を突いていて、下記のような話であった（以下に記した講話の要旨が同寺のHPにも記載されているが、そちらは優等生の作文に修文されていて些か面白味に欠ける）。参考までに、ここでは第1回目の巡拝の折に聞かされた老住職の蘊蓄説法を以下に引用する。

「貴公は、風呂から上がってパンツを穿く時に手で何回パンツを触るか考えてみたことがあるか？」。

いったいこれは何を言い出したのじゃ？ 何の説教かいナ？ 住職曰く、「パンツのゴムの左右前後を握って引き上げて4回、男なら玉と棹も握るのでこれで2回、合計6回、どうじゃ、どうじゃ、マイッタか！」。

参るも参らないも、何が何だかサッパリ分からぬではないか。怪訝な顔で聞いていたら、住職また曰く「貴公は修業が足らん。自分以外の人びとには絶対頼めないものがある。例えば物を喰うとか排泄するとかいう行為じゃ。このような行為を一日に何回するかを勘定してみろ。このような行いを数えてみるのが、即ち、かけがえのない自分自身を顧みることであり、これが即ち“唯我独尊”ということじゃ」。

住職続けて曰く、「赤ん坊の時には、これらは全て母親がやってくれた。当山の観世音菩薩サマはお優しい母親の姿をしておられる」と言って、御本尊・阿弥陀如来の脇に祀られている千手千眼観世音菩薩の左手の一番下の向きを見て見るとノタマツタ。

暗くて良く見えなかったが、この左手は掌が後ろ向きになっていた（右の観世音菩薩の白○内）。

住職の話では、普通の手（例えば右手の一番下の手）は掌が前に向いていて、これは衆生の悩みや苦しみを救い上げるために前に向いているのであるが、この左手の一番下の掌は後ろ向きになっていて、これは背中に子供を背負っている手の形だそうで、観世音菩薩の慈悲を表わしているのだそう。住職は、普通の観世音菩薩にはこのような掌の向きは少ないので、この寺の千手千眼観世音菩薩はそれだけ有り難い仏様であることを強調するのを忘れなかった。

住職重ねて曰く、「ところで貴公は、“観音”という意味をご存じであるか？」。恥ずかしながら小生、“観音様”とは女人の身体の有り難いある部位の俗称というくらいしか知らなかった。衆生の悩みや苦しみを救い上げるために“観”たり、“音”を聴いたりされるのが観音菩薩であると



（慈光寺観音霊場の本尊、千手千眼十一面観音立像。

引用出典：同寺パンフレット。白○は筆者追記）

いう、云々・・・ナルホド、なるほど、マイッタ、まいった。しかし考えてみれば、印度仏教のカーマーストラという有り難い經典には、精神の解脱には肉体の開放が欠かせないと書いてあるではないか。

さてさて、またまた横道に逸れた。本題に戻ろう。

今回は住職が若い住職に代替わりしていて上記のような餌食にはならなかった代わりに、ご朱印を押してくれただけで蘊蓄も宣まわれず、また世間話ができるような雰囲気でもなかったのも、デマンド・タクシーを呼んでいた時刻に間に合い過ぎるほど間に合った。

この寺で見るべきものは国宝、重文などの寺宝であろうが、これらは小生には猫に小判である。観音霊場の御本尊である十一面千手千眼観世音菩薩立像（寄木造り、黒漆箔、像高九尺、県指定文化財、前頁の写真）は格調の高い整然とした観音様であるが、秘仏であるので4月の観音縁日にしか開帳されない。

マ、奥武蔵の山並みでも眺めながら深山幽谷の風に吹かれて山紫水明の境内をブラブラと逍遙するのがよろしかろうと思うが、それだけでは功德も無からうから少しは仏縁にも触れることも必要であろう。

冒頭に写真を出した観音堂は如何にも山中の素朴な小堂という佇まいであるが、どこことなく由緒と気品が感じられる堂宇であった。天井を見上げると柱、虹梁、欄間には沢山の彫刻が施されていた。じっくり観れば興味も湧くのであろうが、白内障重症の小生には凸凹程度にしか見えなかったのが残念であった（右写真）。

境内には申八梵王（さるはちぼんおう）というユーモラスな猿の石像が祀られていた。猿は昔から山の神や山の神の使いとして信仰され、特にこの地方は山仕事の人が多かったので山に出入りする人達がこの石像を拜んでから入山したのだそう。刻文には天明6年（江戸時代）とあるから、浅間山の噴火による天明の大飢饉、各地に発生した一揆、打ち壊し、老中田沼意次の失脚、幕藩体制の弱体化等の社会不安が募る中で庶民は何かを祈りつつこの猿像を拜んだのであろう。御幣を担ぎ、扇子を手を持った猿の姿が微笑ましい（右写真）。

麓からの参道の途中にはかつての山門跡があり、その広場には大きな板碑（青石塔婆）が9基建っている。これらの板碑は鎌倉時代から室町時代に掛けて建立された石碑だそうで、刻まれている阿弥陀種子の梵字が美しく格調が高い。



これらの板碑は豪族などが逆修供養（生前に極楽往生を念じる供養）のために建立したものだそうだ。これらの板碑が建立されている広場の樹間からは埼玉県西部の都幾川流域の平野や丘陵が一望できた。一見の価値ありと思うので、是非お立ち寄りを。



（旧山門跡 板碑群）



（板碑に薬研彫で刻まれた阿弥陀如来の種字・キリーク）



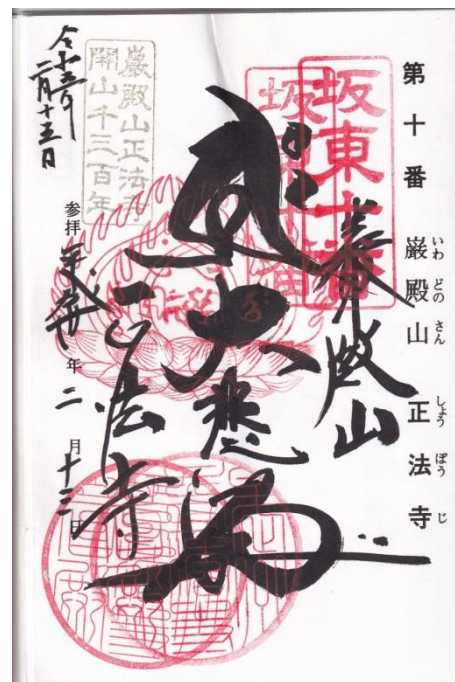
（阿弥陀如来の種字（しゅうじ）
梵字 キリーク）

「種字」とは、夫々の仏に梵字1文字を割り当てて各仏の表象としたもの

交通 東武東上線「武蔵嵐山駅」から路線バス（イーグルバス）30分「せせらぎバスセンター」下車。
（この路線は便数が少ないので要注意）同センターから「ときがわ町営デマンド乗合タクシー」（要予約）で慈光寺まで15分

第2回目巡拝日：令和5年2月1日

第十番 岩殿観音（巖殿山正法寺） 真言宗 千手観世音菩薩 埼玉県東松山市



（境内の岩殿の穴に祀られた日本百観音、四国八十八ヶ所の写し本尊）

この寺の一带は秩父に近いので冬には雪が降り、今回参った時も前回も境内には消え残った雪が残っていた。埼玉県西部の郊外にあって山奥の地という訳ではないが、境内の裏山は切り立った岩壁になっていてそこに掘られた岩殿に日本百観音や四国八十八ヶ所の写し本尊が祀られていた。この寺の次の札所は隣町の吉見町にある第11番札所「吉見観音」（岩殿山安楽寺）であり、また同じ町内には二百基以上の横穴墓群で有名な「吉見百穴」という国指定史跡もあるから、この辺り一带は大きな岩盤の上に載っている地形かもしれない。そういえば隣の秩父盆地も大岩盤の上に載っているようで、そのために各地がジオ・サイトとなっており、その続きがこの辺りまで延びているのかも知れない。

さて、この第10番札所・岩殿山正法寺は源頼朝の御家人であった比企氏一族及び頼朝・政子夫婦の帰依が厚く往時は関東や北国に並び無き大伽藍を構えていた名刹大寺であり、また江戸時代には観音霊場巡礼で大いに栄えたそうで、今でも境内の観音堂、薬師堂、地藏堂、鐘撞堂などは清楚ながら往時の由緒と面影を残しているような格調が感じられた。帰途、門前通りを歩いたが、門前の家々の角には往時の屋号が掲げられ、また往時の門前町界隈の案内板標識も設置されていて往時の門前町の繁栄が偲ばれた。



（境内から門前通り。中央右奥には遠く筑波山も霞んで見えた）（往時は置屋だった屋号。今は畑）

前回参った時には、納経所も閉門ギリギリで最寄りの駅まで戻る路線バスも終バスが発車した後だったので、駅前まで用事で下るといご住職が駅まで車で送って下さったので、そのお礼を今回ご朱印を頂いたご子息の若いご住職に伝言したが、その若いご住職もご父君のご住職と同様丁寧な方だった。参拝客が多い札所ではご住職ではなく寺男や檀家の方がご朱印係をやっている場合が多いが、ご朱印を頂く方としてはやはりご住職と世間話等でもしながら仏縁を頂く方が有り難味が多いような気がする。

さて、この寺の最寄りの駅は東武東上線の「高坂駅」である。埼玉県中央部に位置する田園と新興住宅地の駅で鄙の駅であったが、駅前に珍しいモニュメントが二つばかりあったので紹介したい。

一つは、駅西口の大道りが「高坂彫刻プロムナード」となっていて、大通りの広い歩道 1km に亘って彫刻家・高田博厚のブロンズ彫刻が 30 数体展示されている。一人の著名な作家による彫刻作品がこれほど多く並ぶ通りは全国的にも例が無いそうなので、駅からお寺までブラブラ歩きをしながら見応えがある彫刻作品を無料で観賞するのも悪くない。



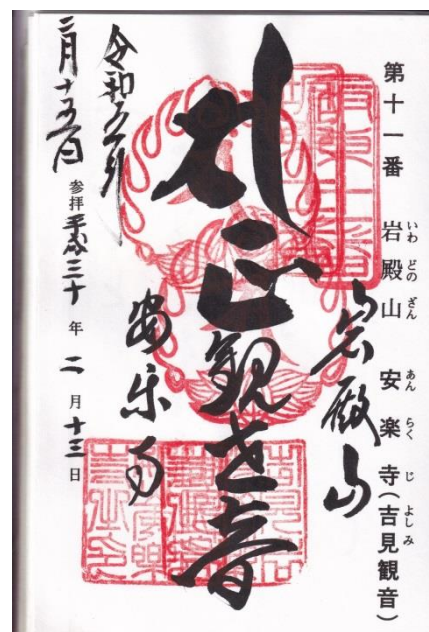
もう一つは、やはり高坂駅西口広場にあったモニュメントで、東松山市の出身で 8 年前にノーベル物理学賞を受賞した梶谷隆章博士の記念碑があった。博士は岐阜県神岡鉱山跡地を利用した宇宙線観測施設（スーパーカミオカンデ）でニュートリノ振動という素粒子物理学上の大発見を観測した物理学者であり、その功績でノーベル賞を受賞された。（ニュートリノ＝素粒子の一種。宇宙から無限に降ってくる）。

記念石碑の上に乗っかっているヘチマのような代物は宇宙から飛んで来た宇宙線が鉱山掘削跡の地下に満たされた純水と衝突して核分裂を起こす際に発する微細な光を電気信号として検出するための光電管である。この光電管が 1 万個もこの掘削跡の水中に設置されていて、宇宙線が通った光跡を解析することによって素粒子の極限微細構造が解明できるという寸法である。実は小生も大学の専攻が原子核物理学（宇宙線物理学）であったので、宇宙線を観測するための仕掛けを手作りで作って観測したが、同じ大学でもスーパーカミオカンデを持つ東京大学と田舎の駅弁大学との研究費の差は星の数ほどもあったであろうから、当方の手作り実験装置で拾えたのは雑音ばかりで肝腎な宇宙線は全く引っ掛からなかった。もう半世紀以上も前のことである。

交通 東武東上線「高坂駅」から川越観光バス「鳩山ニュータウン行」で 10 分、「大東文化大前」下車、すぐ。

第 2 回目巡拝日：令和 5 年 2 月 15 日



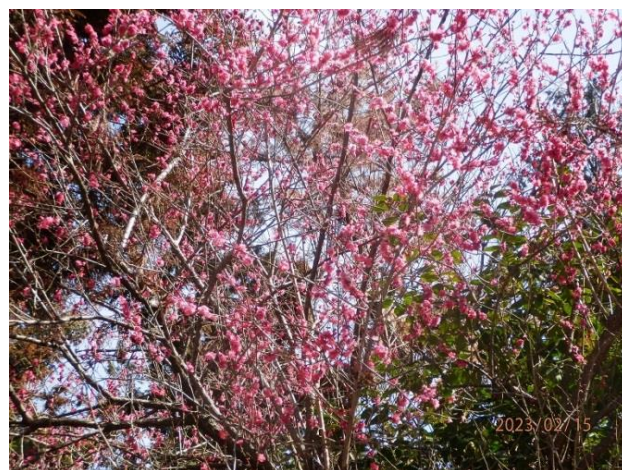


（左：本堂、中央：大仏、右：三重ノ塔）

見どころ

この寺は一つ前の札所第十番「岩殿観音（巖殿山正法寺）」と同宗の姉妹寺であるが、前者が丘陵地の奥山にあるのと比べて、こちらは同じ丘陵地でも開けた土地に建っている。その分だけ境内の雰囲気も明るいものがあるのびやかである。安楽な心持でお詣りできるので、寺号も安楽寺というのではあるまいか。周りも畑や里山などが広がっていて、春になれば梅や桃や花が咲き乱れる桃源郷になるそう。境内の一隅にも紅梅が1本あって今は盛りと咲き誇っていた。

ただ、最寄駅（東武東上線「東松山駅」）から路線バスの便が無いので、この寺にお詣りするだけならタクシーを利用せざるを得ないが、お寺の近辺の丘陵や里山には花のハイキングコースが縦横に走っているので、ゆっくりと一日掛けて東松山駅から春風に吹かれて歩いて詣り、序に東松山駅に戻る途中にある古墳時代の横穴墓群「吉見百穴」（国指定遺跡）に立ち寄って歴史探訪も加えれば、これはもう文字通りの桃源郷で遊ぶ一日となろう。



吉見観音の近くには吉見百穴を上回る規模の横穴墓群が未発掘のまま残っている黒岩横穴墓群もあり、また、吉見百穴のすぐ近くの岩窟には、坂東観音霊場の33札所には入っていないが、岩室観音というのがある。懸崖造りの観音御堂と四国遍路八十八所の本尊を模した石仏が88体祀られていて、首を左から右に見廻すだけの僅か30秒間で四国遍路を満願したのと同じ功德が得られるという有り難い仕掛けにもなっている御堂である。

（百穴や岩室観音の写真を次頁に掲載）



← 「吉見百穴」

園内には茶屋があり、
そこで温かいオデンを
肴にビールを飲みながら
古墳時代の歴史に想いを
馳せるのも悪くない。



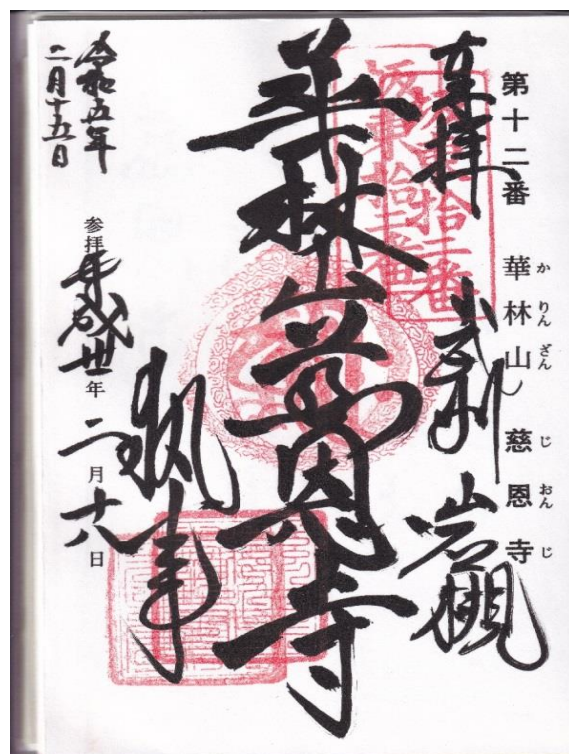
(↑ 岩室観音の懸崖御堂)

(ミニ四国遍路の岩窟石仏群 ⇒)



交通 東武東上線「東松山駅」から吉見観音山門までタクシー（15分）

第2回目巡拝日：令和5年2月15日



埼玉県内の坂東観音霊場札所は4札所である。この内、第9番、10番、11番の3札所が県中西部の東武東上線沿線に固まってあり、残る12番1札所が東部の千葉県寄りに近い春日部にある。最初の9番「都幾山 慈光寺」は交通が不便な山中にあるのでこの寺だけを詣るのに当地からは1日掛かりとなるが、残りの10番から12番の3札所は駆け足なら1日で巡れる範囲にあり今回もそのようにした。帰途、上尾在の岳友と精進落しに大宮で一献。

さて、この第12番札所「慈恩寺観音」は、盛時には14万坪の境内と塔中66ヶ坊を有する大寺であったそうだが、境内には現在では観音堂と阿弥陀堂があるだけで、それも何の変哲もない町中にあるので些か風情に欠ける感じがした。

ただ、少し離れた叢林の中にある別境内には玄奘三蔵法師の霊骨が奉安された十三重の石塔「玄奘塔」が建っていて、こちらは一見の価値があった。この寺の開祖慈覚大師が遊学した唐・長安の大慈恩寺が玄奘三蔵法師を祀るために太宗皇帝により建立された寺である由縁から玄奘法師の霊骨が分祀されているのだそう。



（玄奘塔）



（観音堂横の枝垂れ紅梅が満開）



（老若男女 猫も杓子も観音参り）

見どころ

浅草と言えば、庶民文化の拠点、即ち、参詣、行楽、歓楽を目的とした人々で溢れる江戸有数の盛り場である。老若男女、貴賤を問わず群めいている様子は今も昔も変わりが無い。

江戸時代、水茶屋の看板娘たちは、しばしば浮世絵の主人公になった。また、見世物小屋が立ち並ぶ観音堂の奥は「奥山」と呼ばれ、曲独楽、辻講釈、居合抜、奇術など数々の興行が参詣人を喜ばせたという。

そのような訳で、浅草観音の見どころは参詣よりも参詣後の红灯の巷にあらうと思われる。即ち旦那衆のその筋への登楼などであるが、情けないことに私メはその方面の甲斐性も財布も持ち合わせが無い。

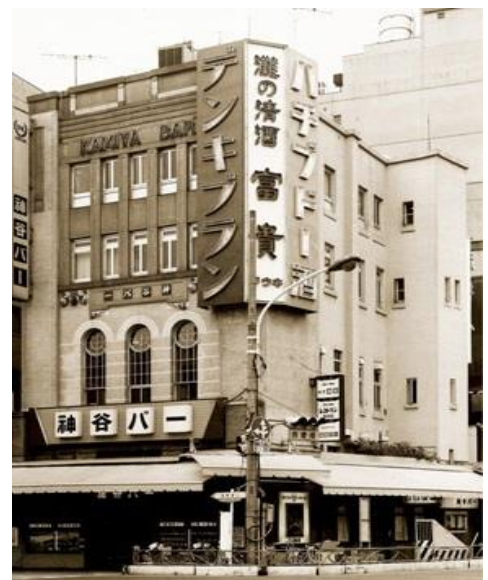
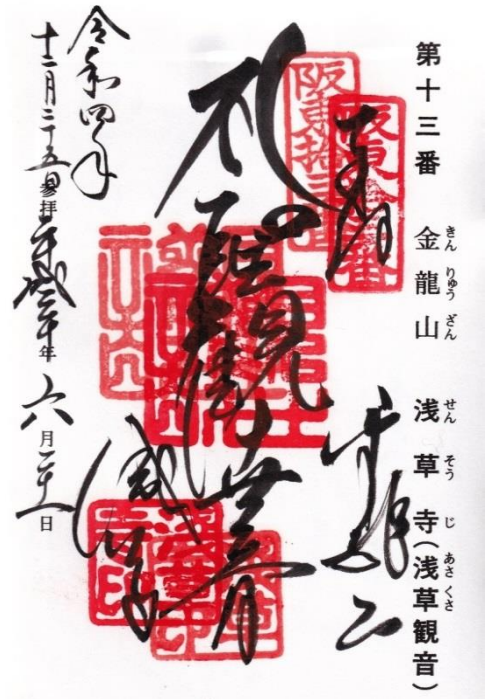
ただ、同じ红灯の巷でも給料日に赤提灯で一杯傾ける程度の財布はあったので、就職して東京に出てきた55年程前には明治13年に日本で初めて開店したバーであった浅草名所「神谷バー」に時々出掛けて行ってその名物メニューであった「電気ブラン」を呑んだものだった。電気ブランというのは、電気に感電したほど激しくシビれるというカクテルで、ブランディーがベースであったのでそのような名前が付いたようだ。

又、この店が開店した明治初期の頃は、ハイカラで珍しい舶来物には何にでも「電気×××」という名前を付けるのが流行ったらしい。

電気ブランは少々甘くて何となくほんわかとしたエキゾチックな味だった。往時は年増の婆さんが切り盛りしていたような記憶がある。55年前のお値段は1杯60円、現在は並み300円、電気ブランオールド400円ナリ。下町情緒満開。浅草1丁目1番1号、吾妻橋袂。左党の方々は是非ご一訪を!!

一人にて酒をのみ居れる憐（あは）れなる となりの男になにを慰ふらん

（神谷バーにて）萩原朔太郎



（昭和45年頃の「神谷バー」、
「デンキブラン」のネオン看板）

見どころ

坂東 33 観音霊場の最初の 4 霊場である鎌倉の寺々（杉本観音、岩殿観音、田代観音、長谷観音）は往時の権力者に帰依されていた為か、どの寺も官製の縁起と権力の匂いが強いが、同じ三浦半島にありながらこの弘明観音は庶民のお寺である。

ご近所のご老体が毎朝集まって世間話をしたり、買い物つ

いでのおバサン連中が寄り集まって井戸端会議を開き、お勤めのオジサン達も通勤の行き帰りにちょっと線香を上げると言った塩梅であろう。

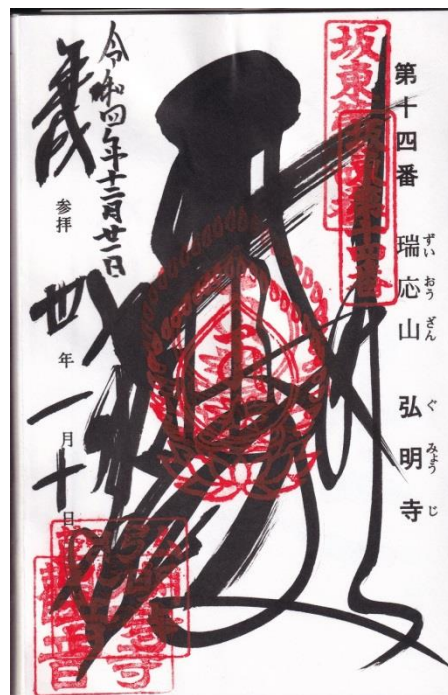
ご近所の老若男女が毎日でもお詣りできるように入山料などというシロモノも無い（五百両の奉納をすれば、御本尊を内陣の厨子の前で拝観できる）。

このように、ちょっと散歩でお参りした人々が灯明を燈し、上げた線香の匂いが境内に満ち流れ、また門番のオジサンがいつも参道の石段の落ち葉を箒で丁寧に掃除している様子は何ともノンビリとしていて気持ちが落ち着くのである。所謂観光客が居ないのも誠に結構。何は無くとも平安浄土。

京浜急行が創立 100 周年を記念して境内に祀った身代わり地蔵尊（右写真）もなかなか味があって、いつも誰かがお詣りしていて、線香の煙が絶えることが無い。余程身代わりの御利益が大きいのであろう。

この観音霊場の見どころは、何と言っても衆生の苦しみを慈悲の眼差しで見つめておられる楡の木一木彫のご本尊十一面観世音菩薩立像であろう。平安時代中期作、伝行基刻。

鈍彫り（丸鑿の彫痕を像表面に残した儘の関東特有の彫り口）に如何にも観音菩薩の慈悲深い御心が顕れているようだ。



（本尊十一面観音菩薩立像、引用出典：弘明寺商店街協同組合HP）





(慈しみ溢れるお顔の本尊頭部、鉦彫の跡に注目 引用出典：同寺HP)

山門を出ると、門前町の弘明寺商店街が横浜市営地下鉄の弘明寺駅まで続いている。オバサンが手に持った買い物籠からは大根やネギなどが覗いていてご近所の住民の商店街であることが分かる。最近は大規模郊外スーパーなどに客を奪われてシャッター街になった地元商店街が多いが、ここ弘明寺商店街は庶民の商店街として元気に流行っているようだった。昼間から赤提灯や赤暖簾がオープンしているところも左党には堪らない魅力ではなかろうか。アーケードの垂れ幕“人情 下町 門前町 「ぐ」”が泣かせる。

昔、放送大学横浜キャンパスでの集中講義聴講などでこの商店街を通った折によく行った「すし処いなせ」も元気に営業していて、イナセで元気な兄ちゃんが握ってくれる握りは当時と同じ値段で昔と同じく旨かった。是非この「いなせ」の暖簾も潜って頂きたいものである。ランチ握り寿司、バラ寿司とも 950 円。横浜市営地下鉄「弘明寺駅」歩 30 秒。



(弘明寺商店街)



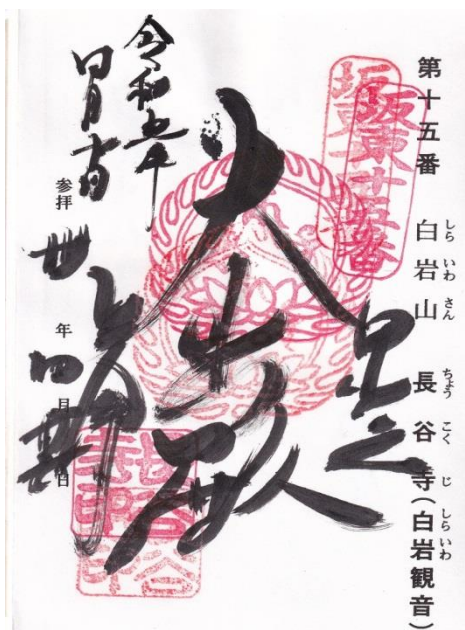
(すし処いなせ)

交通 京急「弘明寺駅」下車歩 2 分 又は横浜市営地下鉄「弘明寺駅」下車歩 5 分

第 2 回目巡拝日：令和 4 年 12 月 21 日

— 28 —

第十五番 白岩観音（白岩山長谷寺）修験本宗 十一面観音 群馬県高崎市



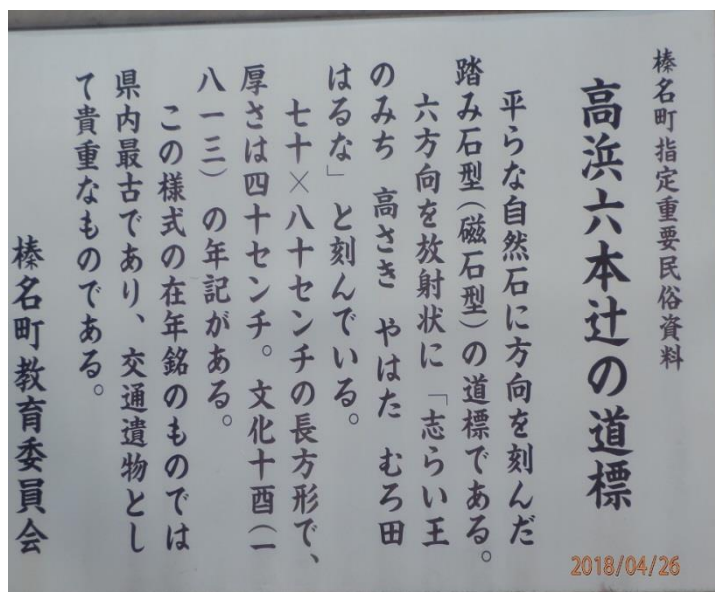
この白岩観音は、高崎駅からバスで 30 分ほどの郊外にあるが、直ぐ奥には榛名山が迫っていて辺地の一角と言える。バス停から結構急坂の道を 30 分歩くと息が切れてきた。

このお寺は本来は金峰山系修験道の山伏寺であったので、坂東観音霊場の参詣者くらいしか参詣する人がいないのであろう、本日も参拝者には誰にも会わなかった。

堂宇と言っても小さな本堂（観音堂）しかなく、僅かな喜捨であるが拝観料 200 円ナリを払って内陣に上がっても本尊の十一面観音は秘仏で拝めないので、境内にはこれといった見ものは無かったので、ご朱印帳に重ね印を貰い写経を奉納して早々と下山した。

お寺からバス停（ドドメキ）までの道は下りであったのでルンルンと下ったが、支尾根の高台に付けられた道だったので、足下に前橋や高崎の市街地がよく見えた。

途中には「高浜六本辻の道標」という 200 年程前に建立された由緒ありげな道標があった。看板によれば相当に珍しい道標だそうなので、是非立ち止まって見て頂きたい。



（道標説明板）

（高浜六本辻の道標。白岩観音はこの奥。鉄枠で囲まれた平石が踏み石型の道標）

なお、平石の道標の右にある仏像の刻まれた標石には、「左 はるな 右 志らい王（白岩）」と刻まれていて、なかなか風格が感じられた。

ドドメキ停留所からバスで高崎駅に戻り、駅構内の「おぎのや」で久しぶりに「峠の釜飯」を味わった。

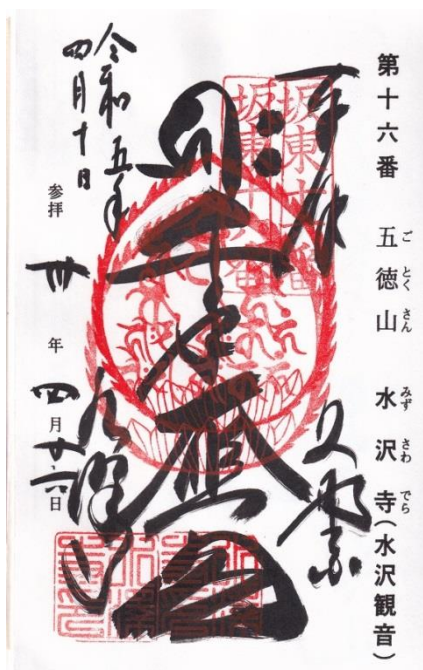


（「左 はるな 右 志らい王（白岩）」）

交通

JR 高崎駅西口から榛名湖行路線バス（関東交通ナス）で 30 分、ドドメキバス停下車、歩 30 分。

第 2 回目巡拝日：令和 5 年 4 月 10 日



比較的大寺の多い坂東観音霊場 33 札所の中でも、観光バスツアー等の遠方からの参拝客で賑わっている寺は鎌倉の長谷観音、東京の浅草観音、千葉県の笠森観音とこの水澤観音の 4 札所ぐらいなものではなかろうか。その中でも、後二者は同じ賑わいにしても前二者とは若干趣が異なっているようだ。

参拝客の様子を見てみると、前二者はどちらかと言えば観光の方がメインであろうと思われるが、後二者の方は同じバスツアーにしても参詣がメインと思われる。この水澤観音は、すぐ近くに伊香保温泉や榛名湖という観光地があり、昼食にはかつての参詣者向けに上州産小麦と水澤山の湧水で作った手打ちうどんで有名な水澤うどんの店が軒を並べているので、参拝した後に観音様の門前のうどん屋で昼食の水澤うどんを頂き、榛名山にケーブルカーで登ったり榛名湖畔を散策したりしてから伊香保温泉で一風呂浴びるというバスツアーがあってもおかしくないであろう。

さて、この水澤観音「五徳山長谷寺」は推古天皇、持統天皇の勅願により高麗渡来の高僧 恵灌僧正によって開基された名刹だそうで、1,300 年の歴史があるそうだ。往時は寺坊 300 を数える大伽藍であったらしいが、災禍によって焼失し現在は本堂（観音堂）や六角堂二重塔などの僅かな堂宇が残っているだけであるが、何れも中世建築様式の面影と近世建築特有の華麗さを残した重厚な結構であった。

冒頭の写真に見えるように、本堂の向拝には華麗な仏教彫刻が施されているが、これは全て浮彫で、彫刻全部が浮き彫りになっているのは非常に珍しいものだそう。

また、向拝の天井に描かれた迦陵頻伽（がりょうびんが、極楽浄土に棲む上半身は天女、下半身は鳥）は艶めかしい姿ながら品のある一幅の名画であった。仰向けになって見上げるのは首が痛い、きっと何らかの仏縁が得られるだろうから、ご老体も背筋を伸ばして拝観して頂きたい（写真は次頁上段）。

観音堂の隣には二重ノ塔の六角堂があり、台座に載った六体の地藏尊が祀られていて、この台座は人の手で廻せるようになっている。鎌倉の長谷観音の例を出すまでもなく、廻

る台座が経蔵になっている経堂が建っている寺院は各地にあるが、地蔵尊を廻す仕掛けは珍しい。彼岸の須弥山にある地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天人を六道と言ひ、アチラの世界に引っ越した我々はこの六道の闇夜を未来永劫グルグルと廻らなければならない定めになっている。この六角堂に祀られた六躰の地蔵尊は六道輪廻の六道のそれぞれを守っている地蔵尊で、この地蔵尊を3回廻すと真心の供養ができると言われている。最近加齢が酷く体を廻すと頭がフラフラとしてくる私奴は2回廻して止めたので功德は期待できないかも・・・。



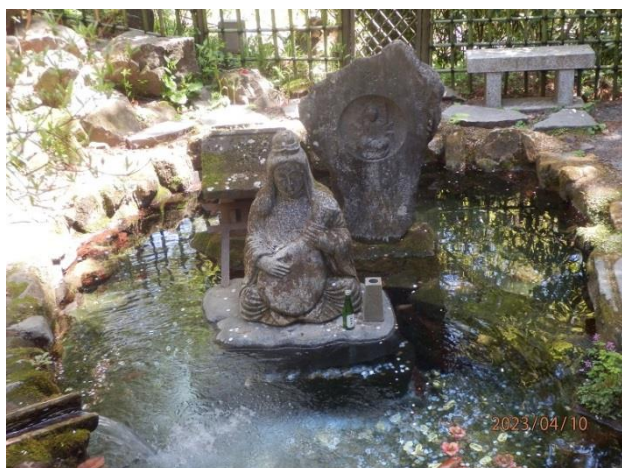
(向拝の天井に描かれた迦陵頻伽)



(六角堂二重ノ塔に祀られた地蔵尊六躰)

(六角堂 二重ノ塔)

また、この寺の境内には池泉が二箇所あった。その内のひとつの池泉には定石どおりの弁財天サマが祀られていたが、もう一つの方には如意輪観世音菩薩が祀られていた。後者の方の祀り方は珍しいのではなかろうか。



(二つの池泉に祀られた仏像 2 軀 左：弁財天と不動明王 右：如意輪観世音菩薩)

寺の境内には地元でとれた野菜・果物、こんにゃく・漬物などの特産品を売る露店が並んでいた。これも往時からの仕来りであろう。浅草観音の仲見世がきらびやかな土産物を商っている店であるのに比べてこの水澤寺の境内に出ている露店は庶民向けの日常食品を売るつつましい店であった。

寺の裏山はハイキングでも有名な水澤山（浅間山）1194m で、境内までなだらかな稜線を伸ばしていた。桜は散り始めていたが未だ桜色のベールを棚引かせていて美しかった。



(水澤観音駐車場の奥に水澤山)

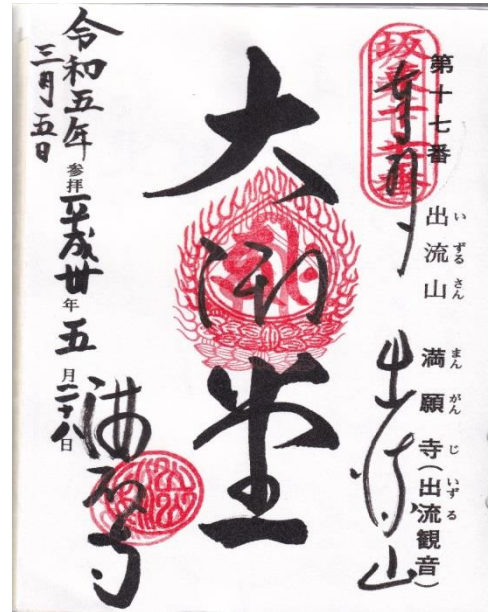
(境内の露店)



交通

JR 高崎駅から伊香保温泉行バス 1 時間、
水澤観音前下車 すぐ

第 2 回目巡拝日：令和 5 年 4 月 10 日

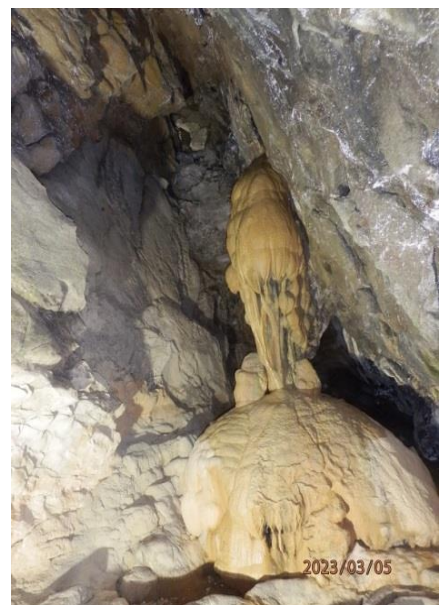


この寺は栃木県西部の足尾山地の東麓にある。位置から言えば栃木市の市街地の西北郊外部であるから、地図では未だ薄緑色に着色されている平地の領域であるが、実際にはすぐ裏の足尾山地を越えればお隣は群馬県という山の中である。

JR 栃木駅を発車したコミュニティー・バス「ふれあい号」は市街地中心部の由緒ありそうな古い蔵が建ち並んでいる「蔵町」を廻って郊外に出、秩父平野に広がる田園地帯を通過して山の中に入って行った。やがて両側から山が迫るような谷間に入ったが、この辺りには石灰採掘場が並んでいて右も左も石灰の掘削跡が生々しい裸の山肌が並び、道路も山の樹木も石灰を被って真っ白に汚れていた。

やがて谷のドン詰まりに小さな集落が現れたが、ここがコミュニティー・バスの終点「出流観音」であった。栃木駅前から1時間10分掛った。集落には家は数軒しか無かったがその全てが蕎麦屋であった。その辺りに貼ってあった出流地区観光ポスターには、“出流観音と蕎麦の里”というキャッチフレーズが印刷されていた。この辺ではどうやらこの二つが観光の目玉になっているらしい（というよりも、この二つしか無いらしい）。

さて、このような人里離れた山中に冒頭写真のような大きな本堂を構えている大伽藍が何故に建立されたのであろうか。この寺の縁起によれば、修験者・役の小角がこの境内の裏山に鍾乳洞を発見し、その中に自然にできた鍾乳石の観世音菩薩が鎮座ましましていたのでこれを霊窟として祀ったのが始まりとされているそうだから、或いは往時はこの地方土着の山伏修験の道場であったのかも知れない。また、この霊窟に21日間籠って子授けを祈願した某女に授けられた子供が後に日光山輪王寺の開祖となった勝道上人であり、同上人はまたこの出流山の開祖でもあることから、現在でも日光山の僧はここ出流山で山岳修験を行なっているとのことなので、ここが足尾修験の根拠地の一つになっていたと考えられる。



（自然鍾乳石の千手観世音菩薩後姿）

そういえば、この鍾乳洞の直ぐ下には鍾乳洞から湧き出る滝があって、滝の落ち口には不動明王なども祀られていて滝行の舞台が造ってあった。名付けて「大悲ノ滝」と言い、現在でも一般庶民の滝行も受け付けているようだ。

この鍾乳洞のある懸崖に懸崖造りで建てられているのが奥之院である。この奥之院は本堂からゴロタ石や急な石段の山道を小1時間ほど登らねばならない懸崖に造ってあるので八十路を過ぎて足腰の耐用年数を遥かに過ぎて金属疲労を起こし、かつ厚労省指定難病の間質性肺炎で息切れに苦しむワタクシ奴には些かキツイ行道であったが、一見の価値はあるので、ご同輩にも是非参詣されることを望みたい。但し、足がフラフラしているご老体は懸崖で足を滑らせて転ぶとすぐ上の鍾乳洞にまします千手観音サマが直ぐにご来迎ましまして西方浄土（穢土？）へお連れ下さるから、お気を付け遊ばされますように。



（懸崖造りの奥之院）



（瀧修行 大悲ノ滝）

なを、この山道には丁目板の如きモノが1番から30番まで設置されていて、ご老体には“はや半分まで登って来たか。残りは半分だ”とか、“もうすぐ奥之院だ。暫く休んで行こう”とか“残るは1枚だから、それ頑張れ”などと自分に気合を入れながら登れるので助かる。しかしながら、それぞれの立て札には今様の説教節やら御詠歌風やら和歌風・俳句風などがてんでバラバラに何の脈絡も無く書いてあるが、これは文章も中身もサッパリで艶消しであった。

斯様なシロモノは四国八十八ヶ所の遍路道にも何処かのナントカと言う法印がまき散らしていたが、有り難味は全く無いシロモノであるからゴミと変わりない。

本堂の下側に設えられている弁天池は小さいながら池泉の結構で、祀られている弁天様も優しいお顔で結構であった（次頁に写真）。

帰途に門前の蕎麦屋で般若湯と天婦羅蕎麦で喉を潤した。結構な味だった。現在は数軒しか営業していないが、かつて出流観音詣が盛んだった頃には多くの蕎麦屋が参拝客を呼び込んで一大蕎麦屋門前町を成していたのであろう。

交通

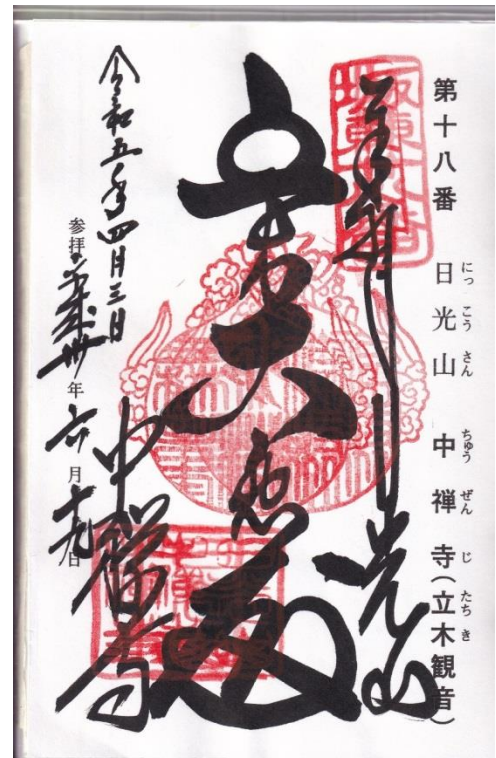
JR 栃木駅からコミュニティー・バス「ふれあい号」1 時間 10 分、終点「出流観音」下車、歩 5 分。バス代は 75 歳以上 100 円、75 歳未満 200 円也。誠に結構。但し 1 日 2 便しかないなので、要注意。

第 2 回目巡拝日：令和 5 年 3 月 5 日



(弁天池の弁天さま)

第十八番立木観音（日光山中禅寺）天台宗 千手観世音菩薩 栃木県日光市



J R宇都宮駅からJ R日光駅まで日光線に乗ったが、4両程の小さな車両は外国人で満員であった。コロナの禁制が緩和され、円安の影響もあってか海外からのインバウンド客がドッと入って来たからであろう。中国系、東南アジア系、ラテン系が多かったようだ。

さて、坂東観音霊場第18番札所の中禅寺は中禅寺湖畔にある。日光と言えばお寺では輪王寺が著名であるが、この中禅寺は輪王寺の別院で開祖も同じ勝道上人である。伽藍の結構では輪王寺に及ばない。

御本尊は、開祖勝道上人が霊峰・男体山の頂上を極めた折、中禅寺湖に示現した千手観音を男体山に生えていた桂の巨木の立ち木に手で刻んだもので、後年の山津波によって中禅寺湖に沈んでいたこの立木が発見されて中禅寺の本尊として奉祀されたものであるそうだ。この御本尊は厨子に納められている秘仏ではなく、観音堂内陣の目の前に安置されているのでよく拝めた。ナルホド、どっしりとした肩幅の仏像はたいしたものであった。



(本尊 十一面観世音菩薩 同寺HPから引用)

観音堂から階段を登ると五大堂に着く。五大堂には不動明王、軍荼利明王、大威徳明王、金剛夜叉明王の五大明王が祀られており、また天井には大雲龍が描かれていて恰も生きているように這っていた。ここから中禅寺湖を望む風景は絶景で、右には男体山、奥には未

だ白い雪を被った日光白根山（標高 2572m）が聳えていた。



（五大堂からの眺め 中禅寺湖の右の山は男体山、奥の雪山は日光白根山）

交通 JR or 東武日光駅から中禅寺湖方面行バス 40 分、「中禅寺温泉」下車 歩 20 分。

第 2 回目巡拝日：令和 5 年 4 月 3 日



同じ坂東観音霊場 33 札所の中でも、神奈川県、東京都、埼玉県の 3 都県内にある 14 札所は拙宅（神奈川県藤沢市）からは比較的近いのであるが、栃木県、群馬県、茨城県、千葉県の 4 県内にある 19 札所はグ〜ンと遠方になって、早朝に家を出て始発電車に乗っても帰宅は夜中近くになるので日帰りでは草臥れる。

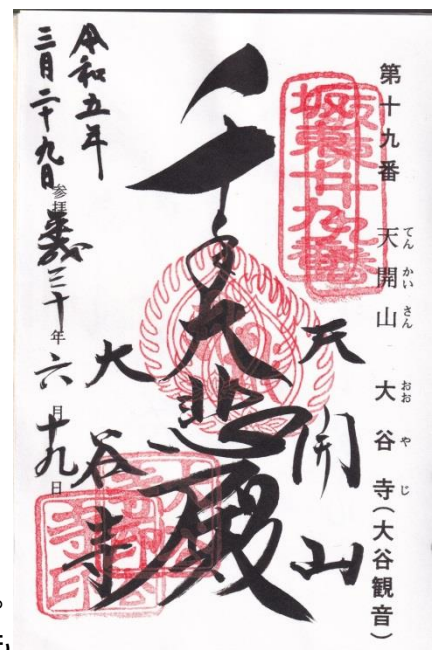
この宇都宮市の郊外に位置する大谷観音も、拙宅からは JR 上野東京ライン（昔の東海道線と東北本線の相互乗り入れ）の鈍行で宇都宮駅まで 3 時間、さらに宇都宮からバスで 30 分、合計で片道 4 時間近く掛る

今回は時節柄 JR の大幅割引切符「青春 18 きっぷ」なるモノを使って行って見た。昔はこの切符を使って故郷の岡山まで往復したものだった（岡山迄行けば運賃は 1/10。宇都宮は近距離なので 1/3 程度にしかないが、それでも帰途の紅灯のお布施には充分間に合うので、年金生活者にとっては嬉しい限りである）。

マ、それは兎も角・・・。

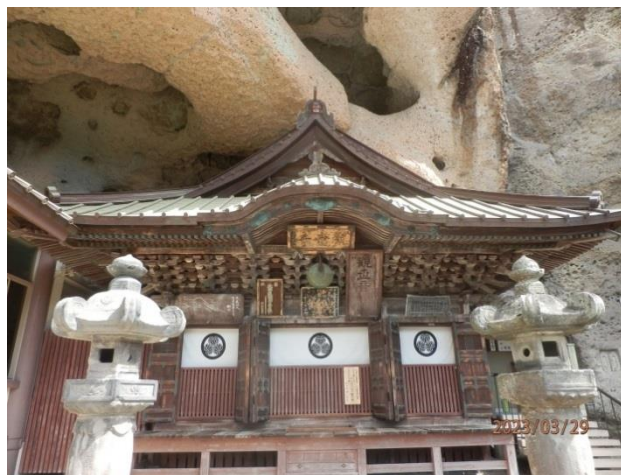
この大谷観音は日本最古の石仏（平安時代）と言われる千手千眼観世音菩薩の磨崖仏が本尊として祀られ、また、釈迦三尊、薬師三尊、阿弥陀三尊の合計 10 躰の石仏が脇堂の磨崖に刻まれている石仏の寺院である。冒頭及び次頁の寺院の写真に見えるように、巨大な岩山の洞窟が観音堂本堂となっている。逆に言えば、この寺の伽藍はこれらの磨崖仏とこれを護るための片屋根だけが磨崖に立て掛けられた本堂らしき小さな伽藍しかないという訳でもあるから、参拝する方も極めて単純明快で誠に結構なことである。

本尊の千手観音菩薩の磨崖仏は弘法大師が平安時代にこの地を行脚した際に彫ったもの

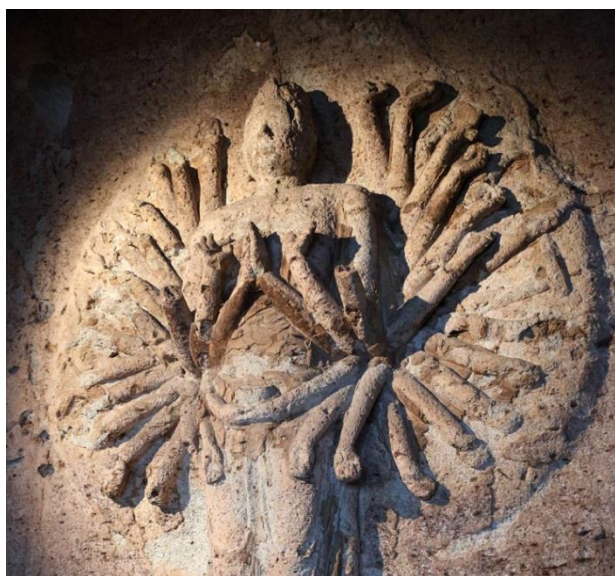


と言われているそうであるが（そのためにこの寺の開基は弘法大師となっている）、マ、これはこの世界では普通にある作り話であって、専門家の鑑定によると刻彫の特徴がシルクロードのバーミヤンの石仏と共通していることから、平安時代に渡来したアフガニスタンの僧侶が刻んだものではないかと考えられている。

彫刻は相当に痛んでいて顔の面相は崩れ落ちているが、観音の慈悲が感じられるおらかな鑿であった。また、脇堂の磨崖に刻まれた釈迦三尊、薬師三尊、阿弥陀三尊も見応えがあった。これら以外にも寺の裏山の岩壁には小さな磨崖仏が沢山彫られていて、西の「大分県の臼杵磨崖仏」に対して「東の磨崖仏」と並び称されているようだ。



（洞窟の中に差し掛けられた本堂）



（磨崖に刻まれた釈迦三尊、薬師三尊、阿弥陀三尊）

（←磨崖に刻まれた本尊の千手千眼観世音菩薩。

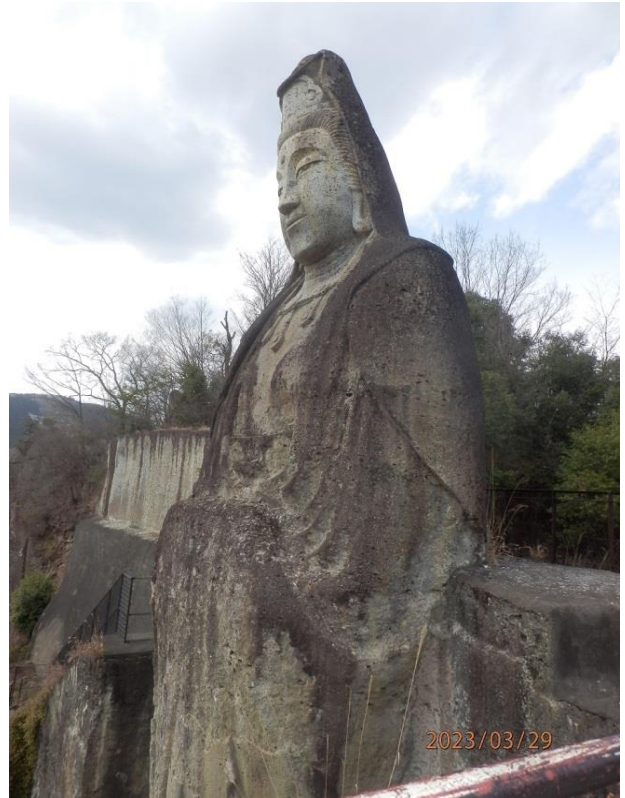
この2枚の磨崖仏の写真は同寺HPより引用）

さて、この辺りは建築石材として名高い大谷石の名産地であったので、お寺の周辺の至る所に大谷石の採掘場跡が残っている。今は大谷公園となっている採掘場跡の石切り場の岩壁には高さ27^尺に及ぶ巨大な観音菩薩像（平和観音）が刻まれていて見応えがあった。東京芸大教授のデザインで地元の石工が刻んだものだそう。穏やかな御顔をされていた。上記大谷観音の千手観音磨崖仏とこの平和観音がこの地のシンボルとなっているようだ。次頁の写真で参詣している人物と比べて見ると、この観音様の大きさが分るというものがある。公園の広場から観音像の肩まで階段が付けられていてその横顔が目の前で拝めるように設えられていたので登ってみたが、息が切れて往生した。

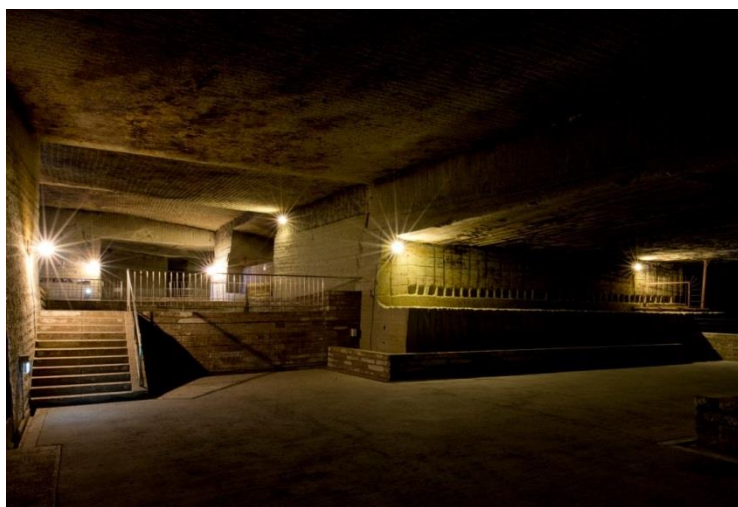
また、寺の裏山には大谷石採掘跡の巨大な地下空間が大谷資料館として公開されていた。地下100^尺まで登り降りする階段を歩くのでここでも息が切れたが、よくぞ人力で掘ったと思われる巨大な穴蔵であった。地下洞の気温は7度であった。

帰途は宇都宮駅前の赤提灯でお布施をしてきた。1回目巡拝の折の5年前に立ち寄った時に大将と話が弾んで楽しかった記憶があるので、今回も寄ってみたがやはり大将のホスピタリティーは衰えていなかった。JR宇都宮駅西口「どっこいしょ」。左党の方は是非お立ち寄りを。

(↓上段2枚、中段左の磨崖仏が平和観音像)



(↑大谷資料館入口)



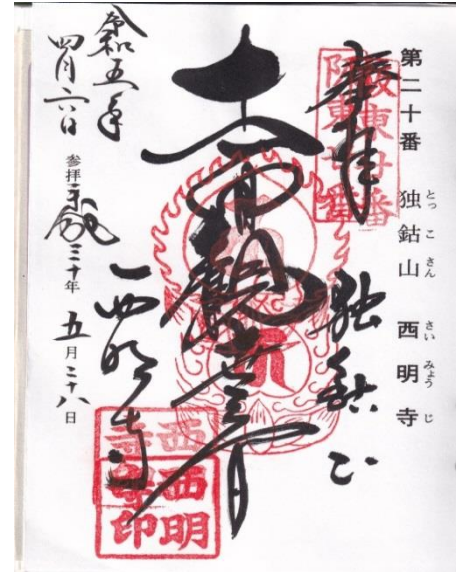
(大谷資料館の巨大な地下空間)



(宇都宮駅西口居酒屋「どっかいしょ」)

交通 JR 宇都宮駅西口から関東バス「大谷・立岩方面行」乗車 30 分、大谷観音前下車すぐ。

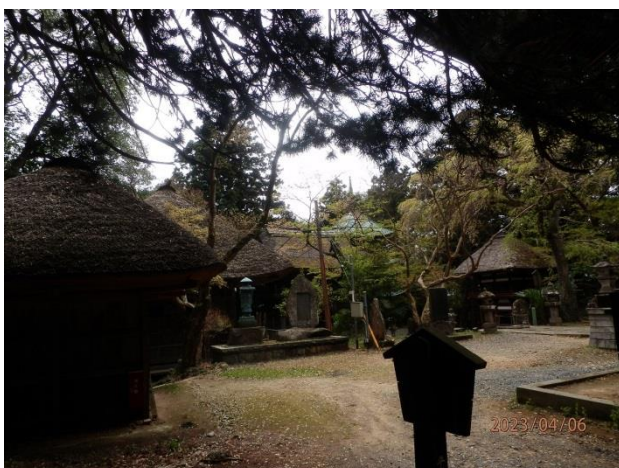
第 2 回目巡拝日：令和 5 年 3 月 29 日



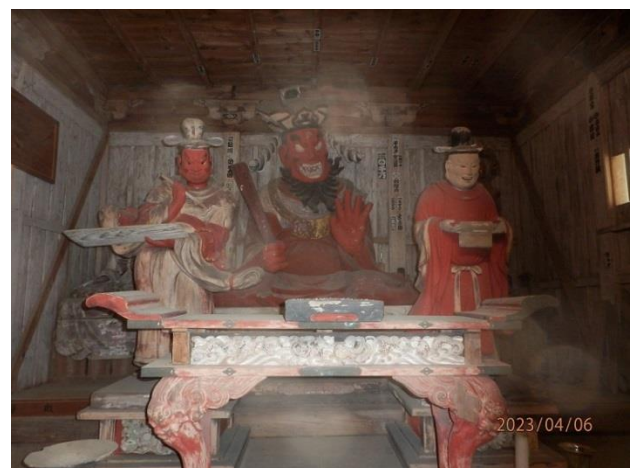
寺院がデイケアセンターや幼稚園を運営しているケースは多いが、この寺のように老人ホームや病院まで併設しているケースは少ない。実はこの寺の門主は癌治療やターミナルケアで著名な医師でもあって、医療施設が少ないこの地方の住民のために境内の一角に診療所を開き、それが今では種々の診療科を持つ病院に発展しているのだそうである。医は仁術也とも言われるが、普通ではなかなか出来ないことであろう。

さて、この札所の見どころは、本堂の内陣に安置されている鎌倉時代作の9軀の木彫観音菩薩群、閻魔堂に祀られている笑い閻魔像などであろう。閻魔大王は普通は怖い顔をしているが、実は此岸のお優しい観音菩薩サマが彼岸では怖い顔の閻魔大王として出張勤務されている訳であるから、笑っている尊顔の閻魔サマがあってもおかしくない訳で、衆生の苦しみや悩みを笑顔で吹き飛ばしておられるのだそう。

また、楼門や閻魔堂など4棟の茅葺屋根の御堂も素朴ながら見応えがあった。



（素朴ではあるが、心が落ち着く茅葺屋根の御堂群）



（笑い閻魔様 閻魔堂）

私が参った時には、境内にも伽藍にも他には参拝者は誰も居らず、境内のドン詰まりの観音堂の冥界を思わせる寂しい内陣に入ってそこに並べられている沢山の諸仏を見ていると何か心の底まで見抜かれているようで恐ろしい心持ちになってきた。やはり脛に傷を持

つ身だからであろう。この調子では、あの世での閻魔大王の御裁きの時にも身が縮こまって、裁判で如何に言い逃れようかと考えて作文してきた嘘八百もどこかに霧消してしまっているのではなかろうか。これでは今までの巡礼で数多の門前町の紅灯の巷で閻魔大王に差し出してきた賄賂のお布施も全く価値が無いワイ。マ、それは兎も角。

このお寺には風流なことに「獨鈷處」（どっこいしょ）と言う名前の洒落た休憩所が設置されていて、洒落たカフェとなっていた。洒落たコーヒー、紅茶、ケーキ類は言うに及ばず、ギネスやハイネッケンなどの本場のビールやカベルネソービニオンなどのワインもあった。昔アメリカでよく飲んだバドワイザーで喉を潤したかったのであるが、帰途の真岡鉄道や JR 水郡線の便数の少ない電車の時刻に間に合わせるためにその時間が無かったのが誠に心残りであった。ア～ア、「獨鈷處」で般若湯が飲みたかったナアと零しながら山里の道をトボトボと益子駅まで歩いて帰ったが、皮肉なことに僅か 30 秒の差で電車に乗り遅れた。次便は 1 時間程待たねばならなかったが、益子駅前には赤提灯やバルはおろか飯屋やラーメン屋なども一軒も無く、駅の隣の観光協会の観光案内ビデオを見ても、ものの 10 分間も暇を潰せなかった。残念至極。

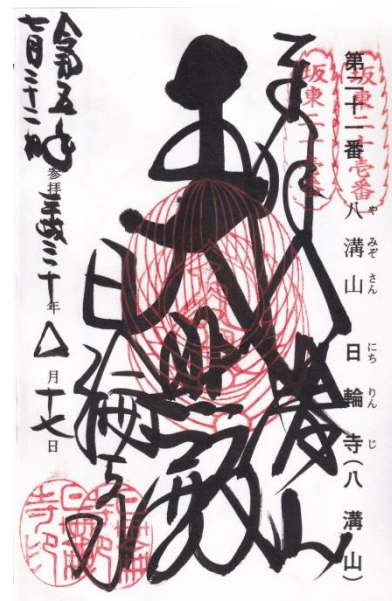


(300 円也を払って登拝した内陣。恐ろしや、居並ぶ仏像に見つめられると身が縮んだ。同寺 HP より)



(益子駅から益子観音へのノンビリした田舎道。益子観音は奥の山の中腹にある)

交通 真岡鉄道・益子駅から片道歩 1 時間。真岡鉄道には JR 小山駅から水郡線で「下館駅」まで行き、下館駅で真岡線「茂木行」に乗り換えるが、何れも便数が少ないので要注意。



坂東観音霊場 33 札所の内、山中の最奥に位置しているのがこの第 21 番「八溝山」（日輪寺）であろう。しかも 33 札所の最北端にある山寺である。何しろ最寄駅は水戸駅から水郡線というローカル線で 1 時間半の常陸大子という田舎の駅から更にバスで 1 時間ほど山中に入った蛇穴という終点のバス停から、更に山道を 3 時間ほども歩いて登らねば辿り着けない場所にある。茨城・福島・栃木 3 県県境の八溝山 1022m の頂上手前の山奥である。

坂東観音霊場 33 札所の中でもそのような関東最北端の最奥地という立地条件に加えてこの寺の廃寺同然の山中の佇まいは、同じ関東でもその最南端に住む私にとっては関東最北端のこの寺こそが実質上の坂東観音霊場 33 札所巡礼の結願寺であると考えて 33 札所の最後に残しておいて今迄のその他の 32 札所を巡ってきたが、巡礼の途中でいつも満願の霊場札所として目に浮かぶのがこの八溝山であった。

実は前回の 5 年前に巡拝した折にも、山道の途中で道を失い八溝山の中腹をウロウロと彷徨い歩いたために辿り着けず翌週再度出直して 2 回目でやっと参拝を果たしたということもあって、この山寺には思い入れが深いのである。

さて、この 21 番「八溝山」の次の札所「第 22 番北向観音」（佐竹寺）も同じくこの水郡線沿線の常陸太田駅が最寄駅であるので、前日に先に 22 番の北向観音を詣でてから常陸大子駅まで足を伸ばし、その晩は大子駅前の旅館に泊まり、翌日に八溝山に詣でた。

泊まった大子駅前の旅館は大子温泉の温泉旅館で、しゃも（軍鶏）料理が名物と言う「玉屋旅館」であった。老舗と言うだけあって部屋や設備は相当の年代物で一晩中クーラーの音が煩くて眠れなかったが、ホスピタリティーや料理はサイコー、料金も格安で、明日は満願という前の晩の宿として観世音菩薩サマが与えてくれた良き仏縁と思いたい。

さて、バスの終点・蛇穴バス停からお寺までの山道は、集落や民家も全く無い北関東山地の北端（東北山地の始まりの南端）の八溝山の山中である。八溝山への登り口には八溝山の神社である八溝山嶺神社の大鳥居と小祠（右写真）が建っていた。



写真に見える石碑には、「八溝山嶺神社」、「月讀神」、「十九夜講？」等の刻字が見えるので、或いはかつてはこの小御堂で月讀講などの夜籠講が行なわれていたのかもしれない。また、この峠道は下野（那須）と常陸の國境でもあったから、両國を往来する旅人の泊場でもあったのではなかろうか。

また、この祠のすぐ横には下の写真のような石碑も建っていた。「馬力神」、「生馬神」、「馬頭観音」と読めたが、前二者の刻字が泣かせるではないか。この峠で草臥れたり力尽きて死んだりした役馬に感謝して建てたものであろうか？

このような路傍の石碑を覗きながら歩くのも、これまた巡礼の一興でもあろう。



さて、途中の林道からは自然度満点の「奥久慈県立自然公園」の山並みを間近に眺めながら誰ひとり居ない山道をのんびりと歩く森林浴コースでもあった。

ただ、前回もそうであったが、日陰の無い真夏の山道は猛暑と湿度 100%で熱中症の寸前、前回はまだ山坂道を登る体力が残っていたが、今回は老化による足腰の筋肉の衰えに加えて2年前に罹った業病（間質性肺炎）のために息切れが激しくハアハアゼイゼイの連続、此岸の灼熱地獄から彼岸の灼熱地獄に直行寸前の体で往生した。熱中症予防の為の飲み水も一升担ぎ上げたのでザックが肩に食い込んで死にそうだった。



（奥久慈自然公園の標柱と山並み）

さて、日輪寺は山中の狭い境内に再建された小さな新しい本堂と今は廃屋のようになっている旧仮本堂（鎌倉時代から修験の寺として隆盛を誇っていた頃の間口 18 間の大本堂が明治時代の山火事で焼失、その後に建てられた小さな仮本堂）が残っているだけの無住の山寺であったが、本堂の安普請と思われるコンクリート造りのけばけばしさは別としてこの旧仮本堂の廃屋具合は天下一品であった（前ページ冒頭の写真）。特に向拝の下に掛けられていた鰐口は古色蒼然たる代物で由緒ありそうであった。破れ壁や格子戸にビッシリと貼られた納め札の類は破れ果てて文字も消えてしまっていたが、往時の面影を偲ばせるに充分だった。境内の四阿に座って遠くまで果てることの無い山並みを見ていると、何か悠久の世界に漂っているような感じがして、この破れ寺の情景もその風景の中に自然に溶け込んでいるようだった。境内には他に見るべき物もないが、天然石に刻まれた弁財天は優美であり艶でもあった。



寺からの帰途は、日に 3 本しかない大子駅行のバスに間に合わすために炎天下の林道を休憩もせず 2 時間走り下ったが、足が立たなかった。今回はバス終点からの往路&復路の 5 時間の歩行時間の内、休憩した時間はペットボトルから水を飲んだ時の 30 秒間を 5 回くらいと、寺での参拝時間の 5 分間くらいの合計 10 分間程度であった。

5 年前に参拝した折も真夏の灼熱地獄の同じルートであったが、その時には疲れは全く感じなかった。今回はバス道路に辿り着いた時にはこの 5 年間の体力の衰えに我ながらガッカリしてへたり込んでしまい、立ち上がる元気も何処かに飛んでしまったのであった。

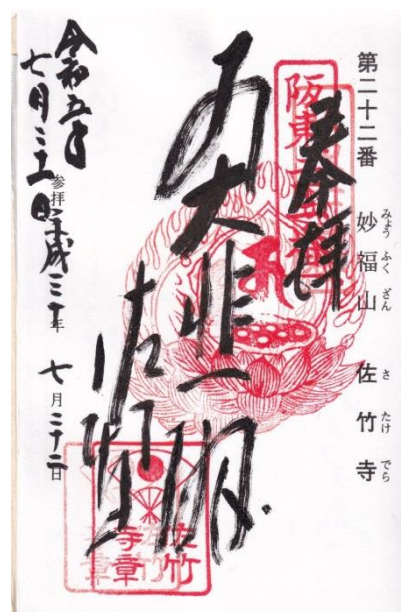
しかしながら、考えようによっては、八十路を越えても未だ日本百観音霊場を巡拝できるだけの体力が残っていることに感謝する方が功德であると考えるべきであろう。

山道での息切れと灼熱地獄に苦しんだ 1 日であったが、今回のこの寺で坂東 33 観音霊場第 2 回目巡礼の結願が果たせたと思えば、これも観音菩薩サマの仏縁と思いたい。

交通&開山時間 本文参照。ご朱印は通いの係の人が居られるので当寺で頂けるが、納経時間は 4~10 月 8:00~16:30、11~3 月 9:00~16:00。1~2 月は雪で閉山。

なお、時間のある人は、この寺の上にある八溝山山頂の八溝嶺神社や常陸・下野・磐城の三國が望める八溝山展望台まで足を延ばされるのも良からう（徒歩で往復 2 時間）。

第 2 回目巡拝日：令和 5 年 7 月 22 日（坂東 33 観音霊場第 2 回目巡礼結願） — 46 —



1,200年前の開創とも言われる古刹だそうであるが、国の重文の茅葺本堂（観音堂）以外にはたいして見る物も無かった。

観音堂は桃山時代の先駆的寺院建築だそうで、重厚な茅葺の屋根が眼を惹いたが、5年前の参拝の時と比べると茅葺の屋根が相当に傷んでいて侘しい佇まいに感じられた。屋根の葺き替えの寄進が募られていたが、喜捨が集まっているようにも見えなかった。

外陣の丸窓や火頭窓も寺院建築では珍しい様式の窓ということなので、外陣のこちら側の丸窓から反対側の丸窓を覗いて見たのが下の写真である。

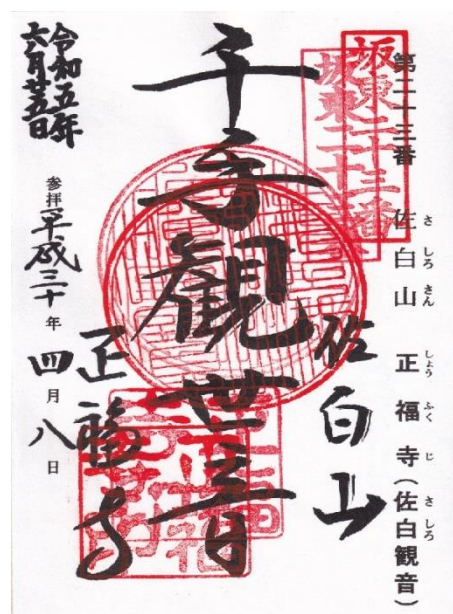


（観音堂外陣の丸窓と火頭窓（手前左側））

交通

水戸駅から水郡線で40分乗車、「常陸太田駅」下車、歩45分。

第2回目巡拝日：令和5年7月22日



この寺は、寺伝によれば飛鳥時代初期の創建で1,300年以上の寺歴を持ち、盛時には七堂伽藍を誇った古刹だそうだが、現在は小さな仮本堂の如き堂宇が建っているだけの寂しい佇まいであった。前回も参拝者には誰にも会わなかったが、今回も参拝者は一人もいなかった。

寺史によれば、往時の宗派争い、後ろ盾だった笠間城主の勢力争い、廃藩置県による笠間藩の廃止などにより寺運も衰微し、明治の廃仏毀釈の災禍によって止めを刺されて焼失、昭和になってやっと小さな本堂だけが再建されたというから、余人には分らない寺院再建の苦難の道があったのであろう。

一方、この寺のホームページを覗いて見ると、漫画チックな寺のキャラクターが案内する今風若者向きの画面が現れた。どこかの通販会社のホームページかと思間違ふような代物で、おまけに各種ご朱印（金銀を散りばめた多数の現代風デザインのご朱印の数々）や寺の仏事商品サービスカタログなどが満載されていた。

一般の参詣者の仏縁や功德には程遠いシロモノであったが、マ、例えば、「事実婚 結婚式、“事実婚の結婚式ご希望の方、本堂にて挙式を行ないます。挙式料5万円”」などというサービスも記載されていた。葬儀・供養・祈願などの仏事サービス商品も料金も含めて詳細に掲載されているので、その方面の仏事サービスを所望される人々には或いは便利かもしれない。また、観音堂の壁には右のような『恋愛成就』なる幔幕も掲げられていた。

とても若者が拝観に訪れるような寺とも思えないが、若者向けデザインのご朱印の開発など、若者をカミ・ホトケの世界に呼び戻す手掛かりとなるなら、これはまたこれで結構なことかも知れない。近年の信心離れの世相の中でお寺を維持してゆくのは大変なことであろうから、このようなアイデアも必要なのであろうと納得した。



さて、寺の PR によれば、この寺の観音本尊は髪の毛筋などが端正に仕上げられている端麗な御顔で、京都三十三間堂に祀られている湛慶作の観世音菩薩像に酷似しているそうであるが、前回の参詣時には 1,500 両のお布施を奉納しないと拝顔できなかったのが儉約のために割愛した。

今回も特定のツアー参拝客にしか開帳しない方式に変わったとかで拝顔できなかった。仮本堂の如き小さな観音堂も外扉に鍵が掛って完全に閉鎖されていて外陣さえ拝むこともできなかった。

以前は観音堂の続きの棟に納経所が設けられていたが、納経所が参道の入り口に移転されてからは、観音堂のある境内はいわば無人地帯になっているから観音堂の失火・放火や本尊などの安全確保のために施錠しなければならないことは理解できるが、鍵で完全に閉じられて中も見えない本堂を拝観するのも参拝する方からすれば実に味気ないものである。何とか良い手立ては無いものであろうか。

御本尊の安全確保のためにはやむを得ないことではあろうが、これでは十一面千手観世音菩薩様も迷える衆生に千手の一本も差し伸べる手立てが無いのではなかろうか。寺の本道は仏と衆生を如何に繋ぐかにあることを忘れてはならない。

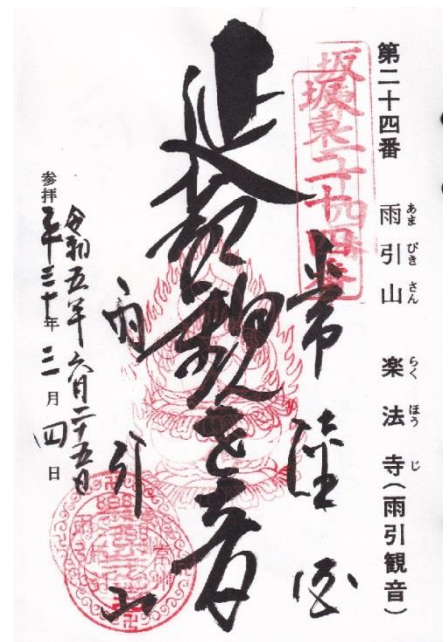


(同寺の十一面千手観世音菩薩、
同寺 HP 旧版より引用)

交通 JR 水戸線「笠間駅」から歩 30 分。

上でも触れたが、この寺には拝観できる伽藍や仏像も無く、御本尊も一般の参拝者には開帳されていない。よって、勢いご朱印集めのスタンプラリーに終わらざるを得ないことになる。参道入り口のすぐ近くにある日動美術館、笠間駅近くの笠間稻荷神社、笠間焼（陶器）などを併せて参観するのも手であろう。

第 2 回目巡拝日：令和 5 年 6 月 25 日



この雨引観音霊場は山腹の広い境内に本堂（観音堂）、奥の院、多宝塔、地藏堂、鐘楼堂、仁王門、黒門、本坊などが並ぶ大伽藍である。寺史によれば、聖武天皇が行なった光明皇后安産の祈願が驗を生じ、また嵯峨天皇が大旱魃除けの降雨祈禱を奉納したところ本邦全国大雨で潤ったという縁起があるというから（山号の由来）、相当な古刹でもあろう。おまけに周りに集落や民家などは無く鬱蒼とした深山幽谷の中に開かれた境内であるから一層の幽邃感が色を添えている・・・と書きたいところであるが、現実には幽邃などということは何処かに飛んで行ってしまっていて、境内は押すな押すなの大混雑であった。偶々お寺の紫陽花祭りの最中の梅雨の中休みの日曜日であったことも人出が多かった原因であろう。

実はこの寺は上記の光明皇后安産祈願の故事から安産、子育ての祈願寺でもあるので、若夫婦や乳幼児を抱いた子育て祈願家族連れなどの参詣者が多く、またこの寺の折からの紫陽花祭りの見物でもあろうか、若者カップルも随分多かった。観音霊場では普通は巡拝の若者に会うことは珍しい。

麓の入山口から境内の駐車場までの 2km 程の参道車道は参拝マイカーの大渋滞で動きがとれず、私は岩瀬駅から市営バスを利用したが普通なら 20 分くらいでお寺に着くのであるが、今回はたった 2km 程の参道を登るのにバスで 1 時間近く掛り、駅から合計で 1 時間半ほども掛った。

山紫幽邃の森閑とした古刹の伽藍も風情と趣があって良いものであるが、同じ古刹でも来世に帰依を求める老人ばかりがお参りしているばかりではなく、楽しいことで賑わっているお寺もいろいろな参詣者を眺めていると、眺めている方もそれなりに楽しいもので、何となく華やいでもいるし、また、微笑ましい庶民風景でもある。

しかし、今回のように境内に立錐の余地もないような混雑では本堂で参拝するにも大行列に並ばなくてはならないし、押すな押すなの境内は歩くにも歩けない混雑であったので、本尊は遥か彼方から参拝して退散した。

このお寺の御本尊は延命観世音菩薩で、延命観音を本尊に祀っている寺院は全国でも唯一この寺だけだそうだから是非拝顔したかったのであるが、本堂の内陣に入れるのは子育て祈願の申込者だけということで、今回も拝めなかったのが残念であった。



（雨引観音の御本尊・延命観世音菩薩。同寺 HP から引用）

この寺の諸堂には格調の高い建築物が多いが、中でも観音堂の彫刻は江戸の著名な仏師無関堂円哲の鑿によるものだそうで、見事なものであった。また、仁王門の天井に描かれた龍も色が剥げていたが見応えがあった。



（観音堂の見事な彫刻群。江戸の著名な仏師・無関堂圓鉄の鑿）



(仁王門の天井の龍)



(裏山を背にした多宝塔も見事であった)

折から、境内には 100 種 5000 株の色とりどりの紫陽花が一斉に開花し、紫陽花祭りが開かれていた。6 月中旬から 7 月中旬までの紫陽花祭りの期間中は午後 8 時までライトアップされ、閉門も午後 9 時まで延期されているそうだから紫陽花目当ての観光客も多いのであろう。この寺は入山料は無料なので、紫陽花目当ての近郷からの人出も多かったのではなかろうか。仏事の行事だけではなく、このような庶民サービスもお寺の大切な役目ではあるまいか。通常のお寺ならこのような行事の期間中だけでも入山料を徴収するのが普通と思われるが、無料で開放しているこのお寺の姿勢に拍手を送りたい。



(境内の池の一面に浮かされていた紫陽花の摘花の群れ)



(仁王門と紫陽花)



(屋根に飛び上がった放し飼いの孔雀)

また、境内には人にもよく慣れている孔雀、鴨、家鴨、山羊なども放し飼いにされていて、これらの野鳥が自由に境内を歩いている様子を眺めていると心が和んでくる。孔雀は仏教では吉鳥と言われているので、羽を広げた孔雀を見られた参詣者は験や功德が期待できるのではあるまいか。境内からは筑波山が目の前に眺められた。



(境内から眺められた筑波山と筑波平野)



(大混雑の境内。ご覧のように若者が多かった)



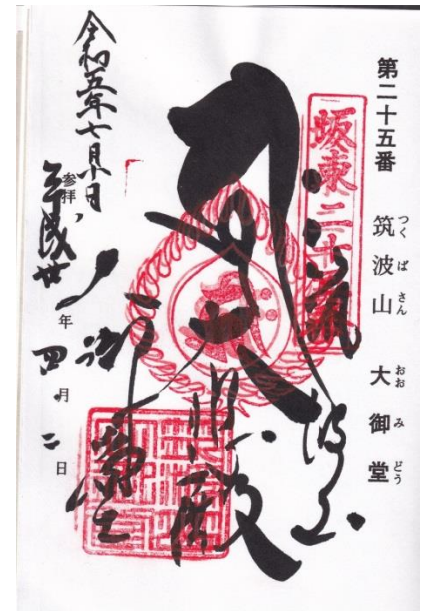
(雨引き観音全景)

この寺の境内の直ぐ下の駐車場（バス停）の傍に薬膳中華茶房「三笠」という店があったので、飲茶を肴に般若湯のビールで喉を潤したかったのであるが、帰りのバスが道路混雑でいつ来るか分らないし、しかも次のバスが終発だそうで、これを逃すと岩瀬駅まで2時間半歩いて帰らざるを得なくなるので、バス停のバス待ち行列に並んで待たざるを得ず、御本尊の延命観世音菩薩サマに般若湯を差し上げられなかったのが心残りであった。

交通 JR 水戸線・岩瀬駅から歩 2 時間 30 分。土・日・祝日は岩瀬駅発桜川市営バスの便あり（便数少）。

第 2 回目巡拝日：令和 5 年 6 月 25 日

第二十五番 大御堂観音（筑波山大御堂）真言宗 千手観音菩薩 茨城県つくば市



5年前の第一回目の巡拝の折には、本堂の改築工事中で御本尊も何処かに疎開されていてバラック造りの仮本堂には御本尊の写真が祀られているだけだったが、3年前に本堂が新築され境内も整備されて真新しくなっていた。

そもそも本来は、大御堂は筑波山全域を寺領境内とする大刹であったが廃仏毀釈令によって廃寺となり、今までの広大な境内伽藍は筑波神社の所有となった。現在でも隣の筑波神社の境内の広さに比べれば大御堂の境内は僅かなものである。しかし、観音堂の前の境内は広い広場になっているので、ここから筑波平野を眺めていると心も広がってくる。



（境内からは筑波平野が一望であった）

次の2枚の絵図は大御堂が盛々隆々としていた頃の筑波山大御堂の伽藍の絵図である。
往時の大御堂の隆盛が目に見えるようではないか。(絵図は大御堂HPから引用)



さて、真新しく新築された本堂もピカピカで気持ちが良く、内陣に祀られた御本尊の十一面千手観世音菩薩坐像も厨子に隠れた秘仏ではなく常時開帳されていてすぐ目の前に拝顔できたのも結構であった。

秘仏と称して何十年に一回くらいしか開帳しない本尊が多い中で、いつでも参拝者に手が差し伸べられるように常時開帳されている仏様はそれだけで仏縁が多いというものだろう。

保存上の問題もあろうが、始終厨子の奥に閉じ込められていては観音様も民の竈が賑わっているかどうかもお覧頂けないのではあるまいか。



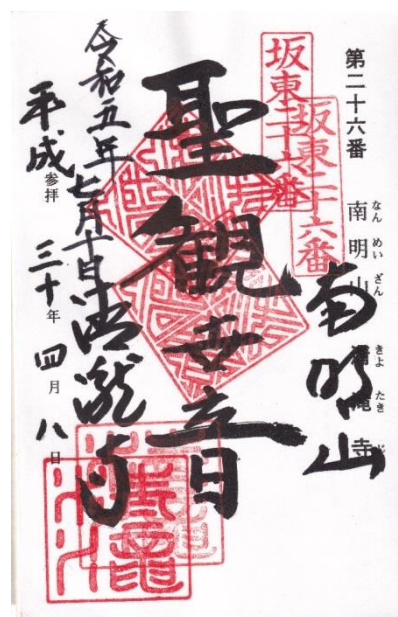
（常時開帳されている本尊、千手十一面観世音菩薩。同寺 HP から引用）

この整備新築された大御堂境内の明るさと対照的に、門前街の佇まいは前回 5 年前と比べて更に淋しくなっていた。土産物屋などの廃屋が至る所に荒れた姿を曝し、その他の家屋や旅館もシャッター街になっていた。長引いたコロナ禍の影響であろうか。

交通

つくばセンター（つくば駅）から筑波山シャトルバス 40 分「筑波神社入り口」下車、歩 10 分。

第 2 回目巡拝日：令和 5 年 7 月 10 日



この寺は推古朝（607 年）の開基で 1400 年の歴史を持つ古刹であり、かつては七堂伽藍の大寺であったそうだが、江戸時代の兵火で焼失、その後再建された本堂も昭和時代に不審火などで 2 回も焼失し、現在残っているのは天保年間の建立と言われる山門だけで、本堂は最近再建された鉄筋コンクリート造りの小さな堂宇であるから、境内はうらびれた侘しい佇まいであったが、これもこの寺が辿って来た苦難の道に思いを馳せれば、そのような逆境の中でよくぞ今日まで生き残ってきたものと敬意を表したい。このことは、本堂の火災で焼けて炭化した獅子の木像が境内の露天に安置されていることから想像されよう。

災禍を逃れて唯一残っている山門は重層造り八脚門のどっしりした楼門であり、現在は風雨に打たれて落剥しているが、年代を感じさせる気品と格調と幽玄の趣があった。山門に祀られた金剛力士像の阿形の方は胎内に小さな阿弥陀如来像を抱いているという珍しい金剛力士像だそう。



（本堂の火災で焼けて炭化した木像の獅子像）



（年代を感じさせる幽玄な山門）

この寺は無住であるが、寺の供養や納経、掃除などは地元のボランティアの方々から毎日登って来られて勤められているそうだが、誠にご苦労なことである。当番を決めて交替で納経所に詰めるようにしているが、皆さん高齢になってきたのでお勤めも無理になり、果たしていつまで続けられるのか心許ないとのことだった。

参拝者も地元の方がお参りされる程度なので納経所に毎日詰める必要も無いのだが、

日本百観音霊場の札所になっている限り、西国などの遠方からの巡礼者が来られることもあるので失礼の無いように納経所に詰めているのだと話されていた。このようなお寺の奉仕活動をなさっているボランティアの方々は単にお寺の檀家であるとか、ご近所付き合いであるとかというようなことからではなく、深い仏縁と信仰心をお持ちの方々であろう。頭の下がる思いがする。

この寺が旦那寺であるのかどうか知らないが、仮にそうであったとしてもこの里山の山麓は小さな集落であるから檀家も少ないであろうし、従って喜捨などの奉納も多くは期待できないであろうから護寺費用等にも困窮されているだろうから、このようなボランティアの奉仕は貴重な活動であろう。

さて、この寺に参る道は国道 125 号線の最寄りのバス停から徒歩で 2 時間ほどの山寄りにある。この辺りの道は田圃や畑や果樹園沿いの道で、前は道の一角に建てられている古い石仏や石碑を観ながらぶらぶらと歩いた。

今回も同様に最寄のバス停から往復 4 時間程歩く積りであったが、この寺の前に詣でた一つ前の札所「大御堂」

を山麓まで下った筑波山口という国道沿いのバス停迄下ってみると、この清瀧寺の最寄バス停方面に行く次のバス便は何と 1 時間半も待たねば来ないとのことだった。折から梅雨の中休みの猛暑日で気温 38℃、バス停も灼熱地獄、この猛暑の中を歩くと老体は熱中症で彼岸の灼熱地獄に送られること必定である。旨い具合にバス停の目の前にタクシー会社があったので、タクシー料金も確かめずタクシーを奮発してこの寺に参り、帰途も国道のバス停まで送って貰ってそこからは路線バスで土浦駅に戻ったが、タクシー代に門前町紅灯での葷酒供奉の 2 回分ぐらいが掛った（約 7,000 円）。マ、これも供養の一端と思いたい。



（巡礼道の途々に置かれていたであろう石仏や石碑が合祀されていた。清瀧観音は奥中央の山腹）

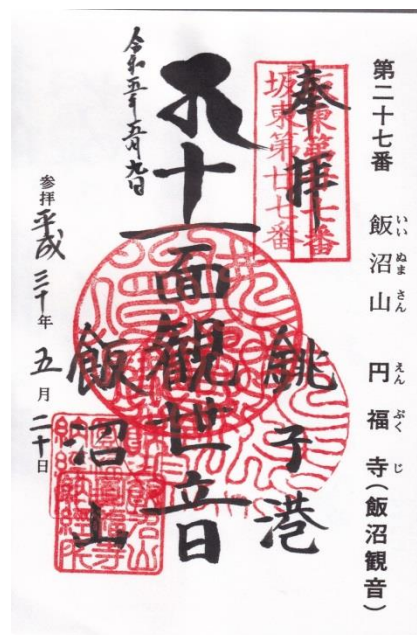


（馬頭観世音菩薩像、上部が破壊されている）



（庚申塔の道しるべ）

交通 JR 土浦駅よりバス（下妻線）30 分「藤沢下宿」バス停下車、徒歩 2 時間。



この寺がある千葉県銚子市は大平洋に突きだした関東地方の東端にあり、一方拙宅は関東地方の西端にあるのでJR電車に乗っている時間だけでも片道4時間程掛かるが（鈍行で）、3両程のローカル電車がのんびりと走る成田線の成田駅を過ぎてからの田園風景は折からの田植え準備で水を張った田圃の水面が陽光に輝き、その上を緑の風が吹き抜けていて誠に心が休まる風景であった。佐原、香取、水郷などの地名が続き、潮来や霞ヶ浦に通ずる広大な田園地帯で、流石は関東平野随一の千葉県の穀倉地帯であった。山や丘が全く見えない広大な一面の平野であった。

さて、この坂東観音霊場第27番札所は、銚子市街地のド真ん中にある。今でこそ銚子の街は醤油産業で有名であるが、そもそもは坂東観音霊場巡礼の門前町としてスタートした町であった。

坂東33観音霊場のうち、この寺の一つ手前は筑波山山麓の第26番・清瀧寺で土浦・佐原を経て100km、また次の霊場である成田の28番・龍正院までは60km離れているので、昔の巡礼はどうしてもこの銚子に宿を取らなければならなかったそうで、そのための旅籠や遊興の門前町が発達したという。

円福寺の寺歴は古いそうであるが、飯沼観音の方は災火で焼けてコンクリート造りで再建されたので、本堂（観音堂）も仁王門も朱色塗がければけけしい上に、雑然とした街中の一角にあるので、観音霊場の雰囲気と情緒には欠ける。マ、少し足を延ばして犬吠埼の大平洋大展望でも楽しめたら如何であろうか。

交通

銚子鉄道「銚子駅」から乗車4分「観音駅」下車歩5分。但し、便数が少ない（1時間に1本）。

第2回目巡拝日：令和5年5月9日



一つ前の札所である銚子の第 27 番「飯沼観音」に詣でた帰路、ＪＲ成田線で 1 時間ほど戻った田舎の駅「滑河駅」で途中下車、ブラブラと半時間ほど歩いてこの寺に着いた。一帯は利根川沿いに田圃が広がる田園地帯であった。

さて、この寺の見どころは、先ずは茅葺寄棟造りの仁王門であろう。簡素にして端麗。国指定重要文化財。室町時代の建造。

また、本堂（観音堂）外陣の鏡天井には一対の天女の彫り物と一対の迦陵頻伽が描かれていた。何れも歳を経て剥げかかっていたが、風格があった。

境内には樹木や草花が整えられた園地があり、極楽の花園のような情緒を呈していた。境内は静かで気品に満ちた佇まいであった。



（茅葺の仁王門）



（観音堂外陣の鏡天井に掛けられた迦陵頻伽）

今朝は 7 時に家を出てからは電車で移動しっ放しであったので昼食を喰う暇が無かった。やっとこの寺を詣でて滑河駅に戻ってから駅前の食堂でビールと天井で夕食（遅い昼食）を摂った。古い一膳飯屋であったが、大将夫婦の応対も良く、料理も美味しかった。モツ煮込みはサイコー。ここに行く機会があれば、是非寄られたし。滑河駅前「食堂・大橋屋」。**交通**ＪＲ成田線「滑河駅」下車。歩 20 分。 第 2 回目巡拝日：令和 5 年 5 月 9 日 — 6 2 —



この寺は千葉市街地のど真ん中にあり、かつ千葉市内最古の寺院だそうだが、その割には参詣者も一人も居らずひっそりしていた。

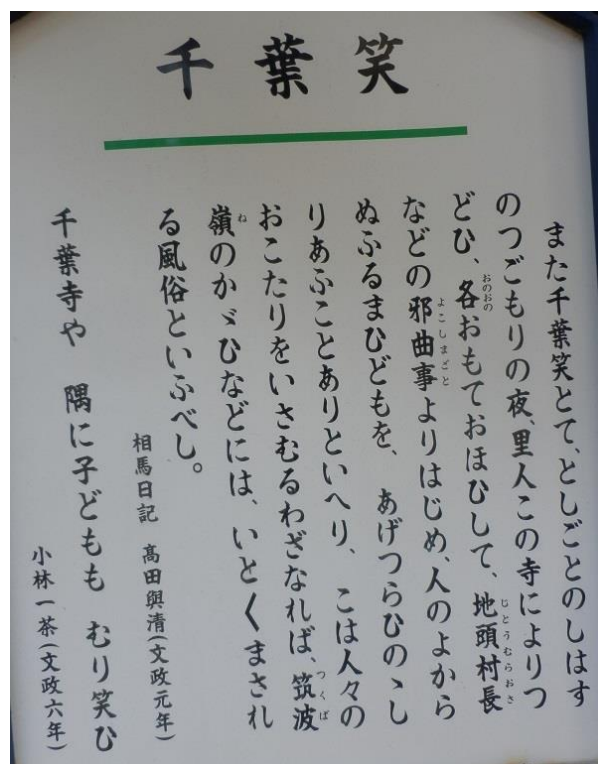
1300 年前のこの寺の創建の時（和銅 2 年）に植えられたと伝わる千葉県指定天然記念物の大銀杏が有名だそうだが、その他の見どころは目に付かなかった。ただ、江戸時代に名の知れた行事としてこの寺で行われていた奇習「千葉笑い」というのが 2010 年から復活継承されているそうである。

この風習は、大晦日の深夜から元旦の未明まで面や頬かむりなどをして素性が分からないように仮装した庶民が千葉寺に集い、殿様や代官など時の権力者の不正や非行などを罵り合いながら笑って年を越すというものである。

時の最高権力者の徳川家康もこの風習を見て見ぬふりをしながら、大名や代官の悪行の様子を探っていたとも言われている。

それはさて置き、民俗伝統行事や地域文化の継承、コミュニティ活動の増大などの御利益があるだろうから誠に結構なことである。

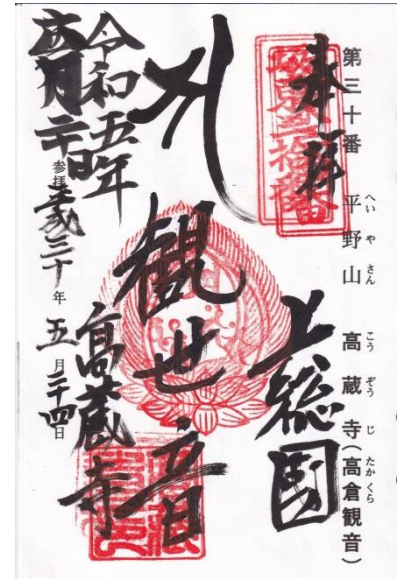
境内の一隅には牡丹園があるが、今年は開花が早く既に散ってしまっていた。



（←「千葉笑い」の様子、バックの大樹は大銀杏）
（千葉市観光協会 HP から引用、被写体人物の個人情報保護のため写真を不鮮明にして掲載）

交通 京成電鉄「千葉寺駅」下車、歩 10 分。

第 2 回目巡拝日：令和 5 年 4 月 29 日



東京湾岸内房の木更津からバスで半時間ほど房総半島の中央寄りに入った所に「かずさアカデミアパーク」という研究開発団地がある。バブルが弾ける前に千葉県が房総丘陵に造成した研究団地であるが、5年前に巡礼した時も僅かな建物があっただけで殆どの区画が空地の儘であった。今回は少しは賑やかになっているかと思ったが、何処も同じ秋の夕暮で益々ゴーストタウンになっていた。周りには里山が広がるだけの何も無い山の中であるから、国や企業の研究所をこのような山の中に誘致しようというのがそもそも無理だったのではなかろうか。マ、それは兎も角・・・。

坂東観音霊場第30番札所「高倉観音」はこのような辺鄙な（長閑な）丘陵地帯の山中にあった。しかしながら、鄙の寺とは思えないような立派な伽藍であった。山門（上写真）は八脚門の重層楼門造り、本堂（下写真）は寺院には珍しい独特な高床式で、88本の床柱に支えられた重層入母屋造りの堂々とした大伽藍であった。

床下には観音浄土巡り、極楽・地獄巡りの結構が設えられていて、観音浄土界では丈二（高さ3.6尺）の樟一本彫本尊・聖観世音菩薩立像全身を足元から拝むことができ、また、日本百観音霊場の写し本尊百体が祀られていて安直に百観音霊場札所が巡拝できる仕掛けになっていたが、果たして仏縁の功德があるや否や・・・。



地獄界・極楽界の間では、埃まみれの古い仏像や珍奇な見世物珍宝（男性

の陽物など）のガラクタがゴチャゴチャと置いてあるだけで、こちらは感心しなかった。

「観音浄土巡り」という立派なパンフレットまで頂いた割にはイマイチであった。床下見学のお布施300両を徴収する係のオジサンの丁寧親切な対応が唯一の取り柄であった。

交通 JR 木更津駅からバス30分「かずさ高倉」下車、歩30分。



千葉県房総半島の外房線沿線にはこの 31 番札所「笠森観音」と次の 32 番札所「清水観音」の 2 霊場があるが、東京湾を挟んだ西側に住んでいる私は時間が掛かるローカル線の外房電車で千葉駅から外房を迂回して行かなければならないので、結構遠い。この両寺を日帰りで巡拝したが、早朝から夜遅くまでの丸々一日コースであった。

扨て、この笠森観音は房総半島真ん中の丘陵地帯にあって、周りにはのんびりした田園風景が広がっていた。こんもりとした樹林の台地に境内が広がっていて、台地に露出した大きな露岩の上に観音堂が建っている。この観音堂は本邦唯一の四方懸造りの御堂で国の重文に指定されているそう。観音堂は高い建物なので、本尊が祀られている最上階まで登る急な階段が長くてきつくて間質性肺炎という業病を患っている私は息が切れた。

階段の途中から御堂を支えている懸崖の柱が林立している様子がよく見えたが、狭い露岩の上で連結された柱や横木の造りがナルホドと思わせた（右写真）。



懸崖造りの御堂は、有名な鳥取県三朝町の投げ入れ堂はじめ全国にゴマンとあるが、懸造りは大抵は一面だけであり、四面全部が懸造りの四方懸造りの御堂は全国でもここ笠森寺だけであるそう。

この様子は、若干誇張された絵図ではあるが、伝二世安藤広重筆の浮世絵「諸国名所百景 上総笠盛寺岩作り観音」（右図、同寺パンフレットから引用）を見ると、よく分る。

さて、観音堂の最上階の回廊から見下ろすと、足下には海洋性亜熱帯樹林の常緑樹に囲まれた境内がよく見えたが、高所恐怖症で足が震えた。濃緑色や黄緑色の樹叢が如何にも南房総の海が近いことを思わせた。

外陣はぐるりと一周できるようになっていて、南房総の平野や山々や丘陵、遥か遠くには南房総の海が浮かんでいてグルリ 360 度の眺望が楽しめた。



（観音堂回廊から境内を見下すと高所恐怖症になる）



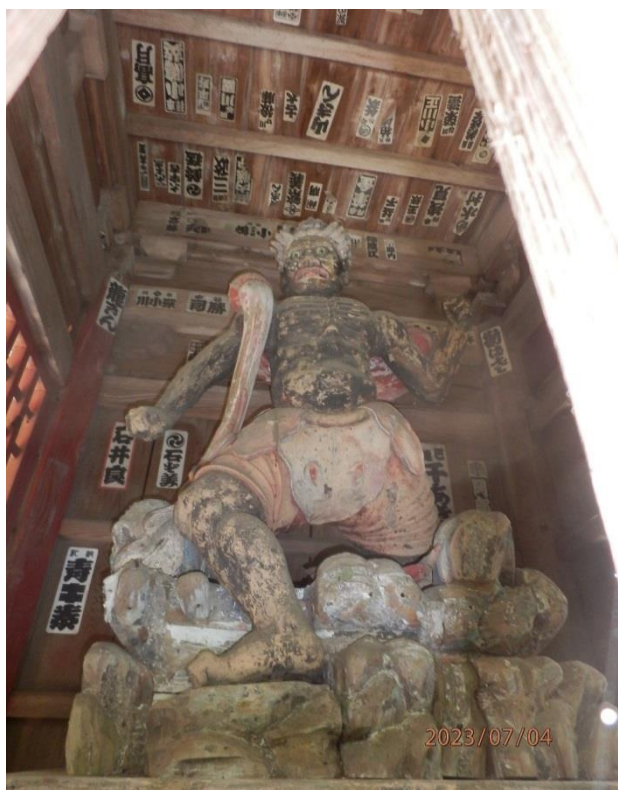
（回廊から果てしない外房の山々の眺望）

さて、この寺は延暦 3 年（784 年）伝教大師最澄が開基したと伝わる古刹であるが、堂宇としては四方懸造りの観音堂しかない。本尊の伝最澄大師刻の十一面観世音菩薩は丑・午歳の秋にしか開帳されないし、普段は内陣に入ることができないので御前立の小さな観音像しか拝めないのも、他には見るべきものもない。

JR 外房線の茂原駅に戻る路線バスは便数が少なく、次便は 1 時間半も持たねばならないので境内のベンチに座って梅雨の中休みの蒸し暑い風に吹かれていても退屈して熱中症になるのがオチだから、参道と境内を分ける結界門（二天門）の中に祀ってある仏像をじっくりと拝んだが、通例なら山門（結界門）は仁王門であるから阿吽の仁王様が祀られていることが多い。

しかし、この笠森寺の現在の山門は二天門であるから、通例なら四天王が祀られるべきところを何の因果か風神・雷神が祀られていた。外房は大昔は旱魃の被害が多かったのだ

ろうか、或いは逆に大暴風雨や台風が激しい土地柄だったのか、いずれにしても風神・雷神サマにお出まし願わなくてはならない土地柄であったのだろう。この寺の二天門に祀られている風神雷神サマは、愛嬌のあるお姿でましましておられるので、たぶん往時のこの地方の農民と風雨を司る風神・雷神サマは親しいご近所付き合いであったのではあるまいか。二天門の裏部屋には脱衣婆と閻魔大王が同居されていたが、何れも本地垂迹本来の優しい顔に戻っておられた。(因みにこの寺の仁王門は境内の裏側に別途あるが、往時はたぶん境内の裏側の方が表参道であったのではなかろうか。



(二天門の風神)



(同 雷神)



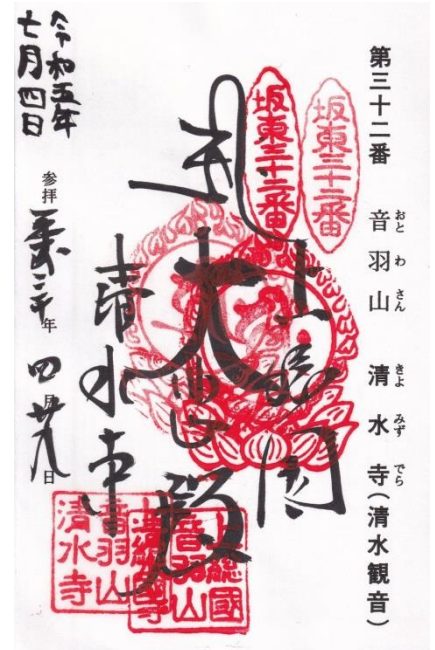
(脱衣婆)



(←閻魔大王)

前回5年前に詣でた折には不便な鄙にあるのにも関わらず多くの参詣客で賑わっていたが、今回は梅雨の最中の平日でもあったためか、数人の参拝者が居ただけで極めて静かな境内であった。納経所の人話では紫陽花が一段落したので、人出も一段落とのことであった。

交通 JR 外房線「茂原駅」南口からバス 35 分（小湊バス「牛久行」）、笠森バス停下車、歩 10 分。
但し、便数が極端に少ないので、時刻表を要チェックのこと。



（仁王門、奥の朱色の門が四天門。鄙の寺院にしては珍しい両門構え）

この札所は、前の札所「第31番笠森寺」から少し南下した同じ南房総の丘陵地帯の里山にあるが、前者と異なり観光客のような参拝者は居らず、腰を曲げて杖を突いたご近所の老人が日課のお参りをしていたり、母親達子供を遊ばせているだけの佇まいの静かなお寺であった。このように庶民がのんびりと寛いでいるお寺は雰囲気落ち付いていて何となく良い気持ちになるものだ。これぞ仏縁というものではなかろうか。

さて、このような庶民的な寺ではあるが、広い境内には仁王門の他にも四天門もあって、格式が感じられる伽藍でもあった。四天門には表の間に多聞天、増長天が住んでおられ、裏の間には風神・雷神が下宿しておられた。因みに四天門は、仏教を守護するために須弥山の中腹の東西南北に棲む持國天、増長天、広目天、多聞天という鬼神を祀って寺域をお守りして頂く結界門である。ここの四天門に祀られている四天王は職業柄怖い顔をしておられるが、一方でそのお姿はユーモラスなものであった。

また、風神・雷神の方は愛嬌のあるお顔をしておられ、猿股は虎の皮を穿いておられた。



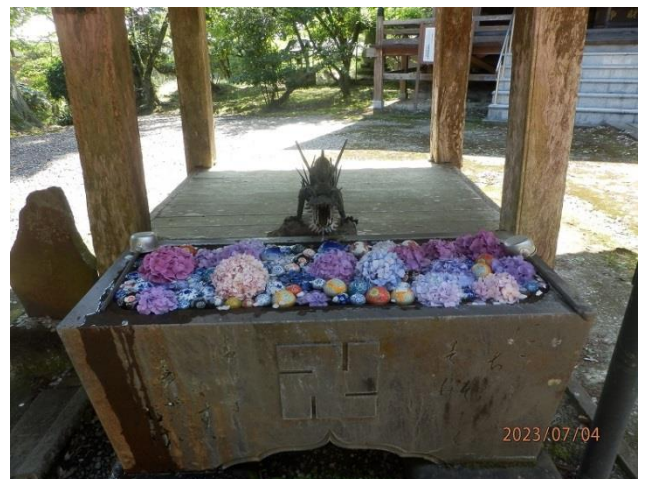
（四天王⇒）





(風格のある四天門)

また、観音堂前の手水鉢には紫陽花の切り花が浮かべてあった。お寺の方の心憎い心遣いである。例えば、同じ坂東観音霊場の札所である鎌倉の長谷観音や先日参詣した茨城県桜川市の雨引観音のように観光客で大盛況の境内の池泉などにこれでもかという程沢山の紫陽花が水面一面に浮かべられているのも結構ではあるが、このお寺のように手水鉢にひっそりと浮かべられているのもなかなか趣深く、飾られた方の人柄を偲ばせた。



帰途に呼んだタクシー待ちの間の30分間ほどを仁王門のベンチに座って境内を流れる緑の風に浸ってゆっくりと時間を潰したが、これは気持ち良かった。

この寺の付近は田圃などの山あいの田園地帯で、季節が良ければ涼しい風が稲田を渡って来て気持ち良いのであろうが、今回は梅雨の中休みではあったが気温35℃、湿度100%の猛暑猛湿で、日陰も全く無い車道を歩くと老体は熱中症で救急車のお世話になること必定であったので往復ともタクシーを奮発した（往復3,5000円）。



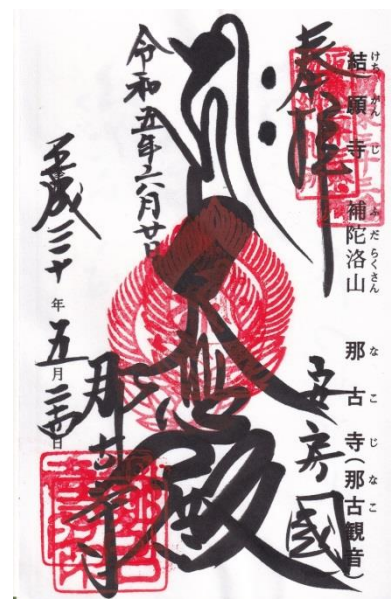
交通 JR 外房線「長者町駅」から歩1時間30分。バス便はなし。駅前にタクシーはあるが1台のみ。駅前での客待ちはしていないので電話で呼ぶが、待たされることが多いので時間的余裕が必要。

補足 この第32番「清水観音」、一つ前の第31番「笠森観音」の2札所はJR外房線の沿線にあるが、外房線の駅はターミナル駅である茂原駅を除き、いずれも鄙の駅で駅前食堂や呑み屋は少ない。それ故、参拝の帰途に観世音菩薩に般若湯を差し上げる直会の場所を探すのも骨が折れるが、以下に紹介する2軒の飯屋（大衆食堂）は応対も味も良かったのでお勧めしたい。値段も格安。

〔長者町駅前〕 源氏食堂

〔上総一宮駅前〕タカラ食堂

第2回目巡拝日：令和5年7月4日



いよいよ最後の結願寺となった。坂東観音霊場 33 札所の結願寺は房総半島の南端にある。湘南・江の島近くの拙宅からは、相模湾と浦賀水道の海上を一直線に泳ぎ渡れば直線距離では 50km 弱であり、天気良ければ東京湾口の向こうに遠望できる距離ではあるが、残念ながら魚匹や河童でない限り海を泳いで渡るといふ芸当はできない。

しかし、三浦半島の久里浜港と房総半島の浜金谷港を結ぶフェリー便があり、これを利用すれば JR 浜金谷駅から内房線に乗り換えてお寺の最寄駅である那古船形駅まで自宅から 3 時間強で到達できるから、電車でグルッと東京湾岸沿いに廻って行くよりもかなり速い。フェリーの乗船時間は僅か 40 分であるが、東京湾に出入りする大型貨物船などを眺めているとアッという間に時間が過ぎた。

さて、那古船形駅からお寺までは浦賀水道（館山湾）から吹いてくる涼しい海風に打たれながら山里の麓の半時間の散歩であった。お寺の境内は道路から石段を登った台地の中腹にあり、仁王門、観音堂、多宝塔、鐘楼などがこじんまりとした境内に並んでいた。

五間四面の大きな観音堂は江戸時代中期の再建だそうで欄間には龍の彫刻三面、その上部の墓股には沢山の精緻な装飾彫刻が施されていた。



また、梁を支えておられる不思議なお方（次頁左側写真）が居られたが、このお方は天邪鬼（アマノジャク）ではあるまいか？ 或いは力士像かも・・・。

国重文の本尊（平安時代後期の千手観世音菩薩、像高 150cm の一木彫、下右側写真）は大きな厨子に安置された秘仏なので拝顔はできなかった。



（天邪鬼？or 力士？）

境内からは足下に鏡ヶ浦（館山湾の別名）がよく見えた。浦賀水道の出口であるが、大平洋の荒波から洲先の岬で遮られた静かな入り江であるので、波が穏やかで海面が鏡のようであることから鏡ヶ浦とも呼ばれているようだ。

そういえば、この那古寺の山号は補陀洛山という。補陀洛とはインド洋の海に浮かんでいる観音浄土で、観世音菩薩がお住まいになっている霊山（須弥山）であるから、マ、この那古寺を鏡ヶ浦に浮かんでいる観音浄土に見立てて坂東観音霊場 33 札所の結願（満願）寺としたのであろうことも頷ける絶景であった。境内裏山の海洋性広葉常緑樹が梅雨の晴れ間の陽光に映えて観音浄土を演出していた。

納経所で帰路の内房線那古船形駅発の電車の時刻を聞いたら、次は 10 分ほど後に電車があるが、これを逃すとその次は 1 時間半待たねば無いとのことで、若いお坊さんが態々駅まで車で送って下さった。駅までは歩けば半時間は掛かり、次の電車には間に合わないの、これは有り難かった。

今迄に通算合計で 400 寺ほどを巡拝したが、帰路に車で最寄駅まで送って下さったお寺は、坂東観音霊場の第 10 番「岩殿観音」と西国観音霊場の第 12 番「岩間寺」の 2 寺だけであった。何れも路線バス利用が不便なお



（ご本尊 千手観世音菩薩立像）



（観音堂から鏡ヶ浦、奥に見える入り江が鏡ヶ浦）



（波静かな鏡ヶ浦、奥は洲先半島）

寺で、前者はご住職が麓の町に用事で降りるついでに車に同乗させて下さり、後者は無住寺の通いのご住職が下山の車に同乗させて下さったものだった。普通はお寺の方が巡礼者を自家用車で送迎するなどということは皆無であるから、この 3 寺のご住職の功德と仏縁に心から御礼申し上げたい。



(那古寺 仁王門)

※本項の写真は冒頭の本堂と末尾の鏡ヶ浦、仁王門の写真を除き、那古寺 HP から引用させて頂きました。

交通 JR 内房線「那古船形駅」から歩 30 分。

第 2 回目巡拝日：令和 5 年 6 月 20 日

~~~~~  
さて、これで坂東観音霊場 33 札所の全ての札所を廻り終えたことになります。  
些かの功德や観音様への仏縁を感じて頂ければ幸甚です。

**拙駄文に最後までお付き合い頂き、誠に有難うございました。合掌。**

~~~~~  
(本稿完)